
オーバーテック・ストーリー

門 九郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オーバーテック・ストーリー

【Nコード】

N5272N

【作者名】

門 九郎

【あらすじ】

十九世紀、ヨーロッパ。数年前突然現れた企業「アオイ・モーターズ」が開発した新しい機械技術。産業革命に大きな変化をもたらしたその技術は「カラクリ」と呼ばれた。

カラクリのエンジニアを目指す少年・ウィルバーはひょんな事から不思議な少女・レオナと出会い、カラクリに隠された秘密を知ることになるが……。

——このオーバーテクノロジーは果たして、僕らの未来をどう変え

るのだろうか――

空想科学祭2010参加小説です。

オーバーテクノロジーの世界（前書き）

空想科学祭2010参加小説になります。

ようこそ、まだ誰も知らない十九世紀へ。

オーバーテクノロジーの世界

その晩、警察官ジョナサン・レザークロスはツイていなかった。

「よおジョニー。パトロールから帰ったばかりで悪いが、お客さんだぞ」

染み一つ無い真っ白な車体のバイクを止め、オフィスに戻るや否や窓際のデスクから声をかけられた。見ると直属の上司であるレストレード交通課長がパイプを片手に雑誌と睨めっこしていた。

「客？ 誰です？」

歩み寄ると、彼が大衆雑誌のクロスワードパズルを解いているのが分かった。書いては消し、また書いてを繰り返しているようで、荒い紙質のページは鉛筆の粉と消しカスで汚れている。

ふうー、とレストレードが煙を吐き出す。

「ほら、先週違法改造のバイクを夜中走らせてて、お前が捕まえた子供が居たる？ あの悪戯坊主がまたパクられたらしい」

煙はゆったりと複雑な曲線を空中で描き、それをジョナサンのため息が吹き散らした。

「今度は何したんです？」

「知らん。四文字でアオイ・モーターズ社長の出身国、分かるか？」
台詞の後半は汚れたパズルのページを鉛筆の尻で叩きながら言う。
ジョナサンは呆れたように肩をすくめた。顎鬚の目立つ口が開く。
「ジパングでしょ。年ですか？」

「ううむ、ただのド忘れだよ、ド忘れ」

納得した様子で答えを書き込むレストレード。右の手にパイプと鉛筆を持ち、左の手で雑誌を支える器用な動作がしわの寄った額と相まって、どこか年老いた猿を思わせる。

正直なところ、ジョナサンは苛立っていた。

今日は同僚の一人が欠勤したせいでパトロールの範囲は二倍、時

間は三倍。しかもその途中でやたらとビークル同士の事故が多く、小競り合いを見つけては仲裁に入り違反切符を切ること延々八時間出発前に近所のパン屋で買ったサンドイッチは食べる暇もなく、午後七時になろうとしている今も紙袋に収まったままだ。もう固く不味くなってしまう事だろう。

やっとの思いでオフィスに帰り着いたかと思えばこれである。

モーターバイクを乗り回す不良少年？ そんなの俺の知ったことじゃない。たまたま前取調べの担当だったからって、何でもかんでも俺に仕事を回すのはおかしいだろ。

ジョナサンは左の拳をレストレードから見えないように握り締め、小刻みに震わせながら上司に反抗するタイミングを窺っていた。

一方クロスワード好きの呑気な上司と言えば、再びパズルでお困りだ。

「また四文字。アオイ・モーターズの社長のファーストネーム。これも何だったかな？ ラジオじゃよく聞くんだが……」

「ヨシノブ・アオイでしょ。さっきからアオイ社に関する問題ばかりですね」

数年前この街に現れた町工場も、今や世界経済を動かす大企業である。雑誌の問題くらいにはなっても不思議は無いのかもしれないが。

レストレードは嗜めるように鼻を鳴らし、

「このページはアオイ社が出してる広告だからな」

そう言っただけジョナサンの鼻先に薄汚れた紙面を突き出す。半歩後ずさりし、視点を離して彼はそれを音読した。

「クイズに答えて豪華商品を手に入れよう！ 抽選で百名様にアオイ社最新モデルのオートバイをプレゼント……」

「悪くないだろう？ 当たったらここに配置してやるよ」

人間から食べ物を盗む、ずる賢い老猿を思わせる目が光る。

「ジョニー、お前には一番に乗らせてやるよ」

「良いんですか！？」

「ああ、私はあんな今時の乗り物に興味は無いからな。自転車で交通管理をしていた頃が懐かしいよ」

この街の警察ではアオイ社の早期からの協力があったことで、数年前からバイクによるパトロールが行われている。道路も整備され、市民の足も慣れ親しんだ地下鉄から自動車やバイクに移りつつあったが、レストレードのような古い技術にこだわる懐古主義者も少なくなかった。

やった！ これで塗装だけは立派なオンボロ白バイとおさらば出来るかも知れない——そう思っで一瞬心を躍らせたジョナサンだが、すぐに表情を戻して両手を上司のデスクに叩き付けた。

鋭い音が二人しか居ない交通課のオフィスに響く。

「……こういう趣味の物で仕事中に遊ぶのはやめて下さい。課長」
「おお怖い。最近の若者は怒りやすいって言うけど、そんな風潮に乗せられては駄目だよ。レザークロス平巡查」

階級の差を持ち出されては、言われた通り平の巡查のジョナサンでは口ごたえしようが無かった。

これ以上は無駄だと思い、挨拶もなしに出口へ向かうジョナサン。ドアに手をかけ力任せに閉じようとした時、背後から呑気な声と一緒に何かが飛んできた。

「おい、これ明日の朝までに空欄全部埋めといてくれ」

さっきの雑誌だった。ご丁寧に懸賞広告のページを開くように折り曲げられ、安っぽい鉛筆が挟まれている。

ジョナサンは反射的にその両端を握りつぶし、そのまま縦に引き裂こうとしたが、

「上司命令だからな」

脳からの指令に必死で抗おうとする両手を抑えて、雑誌のしわを伸ばして脇に挟んだ。

ジョナサン・レザークロス。彼は今日ツイていないのだ。

取調室で待つていたのは確かに見覚えのある顔だった。

「ああ、またこの前と同じ奴なんだ」

開口一番がっかりそうな言葉を口にしたその少年は、ランプの明かり一つの室内でおとなしく座つていた。とは言つても窓のすぐ外の通りにガス灯があるおかげで、実際にはもつと明るい。

いかにも工場労働者といった雰囲気を漂わせる少年は、大体十五歳くらいだろうか。目の色こそ淡いブルーで綺麗だが、伸びた赤毛は煤で汚れ服もお下がりなのかブカブカでサイズがあつてない。

もしかしたら孤児かもしれないな。みすばらしいその容姿からジョナサンは考えた。技術は高度になれど、産業革命がもたらした行き過ぎた資本主義の中、こうした孤児は多い。そんな子供達を資本家がタダ同然で雇い彼らの懐を潤す。そんな悪循環が今ヨーロッパのあちこちで起きていた。

グラつく机を挟んで少年の反対側、ジョナサンも席に着く。

「それはこっちの台詞だ。今度は何やつた？」

ことによつては刑事課の方に事案を回さなくてはならない。面倒だと思ひながら、ちらりと横目で窓の外を見ると、ジョナサンのバイクが駐車場に泊められているのが見えた。

「調書を取るときは名前と職業からだろ」

反抗的と言うよりは無関心な口調だった。態度のなつていない少年に少しムツとするジョナサン。

「詳しいな」

「この手のことは慣れてる」

ジョナサンは子供が嫌いではない。むしろ自分では子供好きな方だとさえ思う。田舎に帰るたびに幼い従兄弟たちの世話を頼まれるが、それを苦に感じたことは無かった。

しかし、子供というのは可愛い生き物ばかりではないらしい。

「ウィルバー・ボーダース。無職。学校へは行つてない。これで良い？」

「ボーダーズは普通のスペルか？」

「そう、普通に国境のボーダーとS。流石にあんたでもそれぐらいは書けるだろう？」

何故自分は年下にいきなり見下されているのだろうか？ 理不尽に感じながらもジョナサンは調書を書き進めた。

「で、何やった？」

「何も。自分のマシンを路肩でいじってたら、いきなりパクられた」「本当にそれだけか？」

「どうやら俺をパクった兄ちゃんは、俺のバイクのフロントパーツが気に入らなかったらしい。そりゃあ、機関砲仕込もうとしているところ見たら普通は止めるかもな」

ジョナサンは思わず頭を抱えた。

「でも、すっげー小さい奴だって！ 手作りだから威力も大した事ないし、後三分もあれば外から見えないように細工が終わったんだ！」

必死になって言い訳を考えるウィルバー。冷たい視線を注ぐジョナサン。

「威力に関係なく、この街で銃の所持・製造は違法だ」

「でも、今まで言われたこと無かった」

「言われなかったらやって良い、なんてお前は小学生か！」
バンッ！

デスクを叩くのは今日で二度目だ。余りに不遜なウィルバーの態度は、とうとうジョナサンの堪忍袋の緒を引き裂いた。性格には彼の上司との関係プレーなのだが。

どうせこの手の子供に怒鳴ることが効果的では無いのはよく分かっている。けれども、だからと言って放っておくのは彼の中の倫理観が許さなかった。例えすぐには意味が無くても、諦めずに間違いを正そうとする努力こそが大切である。そう考えていた。

「……学校なんて……小学校なんて」

「小学校なんて行った事もねえよ！ あんなのに行けるのは札束燃やして明かりにするような連中のガキだけだ！ 俺達孤児がそんな所行けるわけねえだろ！」

しまった……。途端に罪悪感が胸を駆け巡る。自分は触れてはならない事に触れてしまったようだ。

やはりウィルバーは孤児だったのだ。当然学校に行ったことはないだろう。自分のように普通の家に生まれ、人並みの人生を歩む人間が彼の目には恨めしく映っていたのかもしれない。

「すまない。言葉が過ぎたようだ」

ジョナサンが立ち上がり。両手を握り締めながら涙を流すウィルバーの肩に手を置く。

「俺が悪かった。許してくれ。君が望むなら今からでも俺が推薦状を書いて君に奨学金を……」

夜の街に似合わない騒音が窓の外から聞こえてきた。

ジョナサンが恐る恐る窓の外を見ると、彼の白バイが悲鳴を上げていた。盗難防止用の警報装置である。

「畜生！ 黙れ、この！ この！」

その横には大人用のハンチングベレーを目深に被った少年が、必死の形相で警報装置をスパナで殴りつけていた。すぐに警報機は息絶える。

「この、こそ泥めえええええええ！」

言うが早い、ジョナサンはドアを開け、廊下を走り、帰り支度

をしているレストレードの横を抜け、オフィスから外に出た。

バイク泥棒の少年はまだ間誤付まごついていて、バイクには跨またっているものの走り出していない。

考えるより先にジョナサンはそれに向け突進し、少年を捕らえようとした。

――が、

パライイイインッ！

バイクのすぐ横、さっきまでジョナサンが取調べをしていた部屋の窓が割れ、間を空けずそこからしなやかな動きで足が飛び出してきた。

煤で汚れた靴を履いたその足は完璧なタイミングでジョナサンの顔にめり込み、ガス灯にその瘦やせ躯を叩きつける。

「悪いね、おまわりさん」

ウィルバーだった。あの泣き顔はどこへ行ったのか、今は不敵で不遜な笑みを浮かべている。

まだ立ち上がれないで居るジョナサンを尻目に、ハンチングベレレの少年の後ろに乗るウィルバー！

「んじゃ、そういう事なんで。縁があつたらまた遊ぼうぜ」

エンジンがかかり、歴史ある石畳いしだたみの通りを走り出すバイク。

今や自分のものではなくってしまったバイクに向かってジョナサンは吠えた。

「騙しやがったな！」

「言つたろ？ この手のことは慣れてるんだ」

やがて二人組のバイク泥棒は、ガス灯の明かりの向こうに消えていく。

本当に彼は今日、ツイていないのだ。

工業都市・スワープ。

ヨーロッパのとある海沿いにあるこの街はそう呼ばれていた。

十年程前までは漁業が主な産業のただの港町。しかし今では多くの工場が立ち並び、拡張工事が進められている車道には自動車やバイクが走り回る。

時は十九世紀初頭。産業革命真っ只中。

おそらくあなたが知っている世界史の中ではこの頃、自動車はるかオートバイなんて一般普及してはいないはずだろう。確かにそれは正しい。

ここはあなたが今住んでいるのとは、少しだけ違う世界。
まだ誰も見たことの無い十九世紀。

数年前、このスワープに現れた一つの会社からそれは始まった。

アオイ・モーターズ。極東からやって来たという男をリーダーに立ち上げられたその工場は次から次へと革新的な技術を世に送り出した。

アオイ・モーターズが作るエンジンは燃費、馬力、頑丈さ、コンパクト性など全てにおいて既存の技術を凌駕し、工業会に衝撃を与えた。

エンジンだけではない。テレビ、冷蔵庫、電子レンジ。あなたの知っている十九世紀にはないはずの機械の開発に成功していた。

人々は彼らがもたらした技術を、彼らの国の言葉を使って呼ぶ。

——「カラクリ」と

世界は大きく変わった。今やヨーロッパ全土が電気と蒸気機関、ガスランプと電球、古い技術とありえない技術が混在した世界。

これがこの世界の産業革命。

「警察だってちよろいもんだよなあ！　ちよっと泣きまねすれば、子供と思つて油断する」

二人の髪が風に揺れる。

スワープの街の夜風は心地よく、大仕事をやり遂げた少年達の心を鼓舞する。

「うん、窓の外から聞いてたけど、なかなか名演技だったと思うよ。ウイル」

運転する金髪にハンチングを被った少年が相槌を打つ。

ウイルバーは照れ隠しなのか直接は答えず、片手を少年の頬にやつて引つ張る。

「その割りにオヴ、お前は警報機なんか引つかかりやがつて」

「ごめんごめん！　まさか二つも付いてるとは思わなくてさ。ウイルが時間稼いでる間に一つは分解できたんだけど」

オヴと呼ばれたハンチングの少年——オーヴィル・ミルフルールが言った。

おそらくウイルバーよりは年下だろう。彼以上に服のサイズが合つてないせいもあるが、バイクを巧みに操るオーヴィルはかなり幼く見えた。

「でもウイル、あの警官に本名言っちゃって良かったの？」

心配そうな顔をするオーヴィル。

「大丈夫。俺達はいずれ世界一のエンジニアになるんだぜ！　カラクリがこの街にある限り、誰も俺達に敵^{かな}いはしない」

少しだけ、遠い目をするウイルバー。

やがて道は海沿いに変わり、遠目に港の船が見えてくる。

二人の小さな泥棒はそのまま夜の街を走り抜けて行った。近々自分達がとんでもない事件に巻き込まれるとは知らずに。

オーバーヒートな少女

無機質で巨大な部屋の中、少女は立っていました。

そこはとてとても大きな部屋の中。大きな画面、大きなパイプ、大きなランプ。少女にはおよそ仕組みの分からない大きな機械が設置されています。

いや、むしろ部屋自体がその機械の為に用意されたと表現した方が良いでしょうか？

機械を冷却するためのファンの風で、少女の肩ほどまで伸びた黒髪が揺れます。清楚なデザインのスカートが揺れます。襟元に付いた細いリボンが揺れます。

揺れています。いろんな物が、彼女の心も。

「本当に行かれるのですか？」

どこからともなく男の人が現れました。黒いスーツに可愛い模様のネクタイがどこか滑稽です。

サングラス越しに少女を見つめる目。彼女の意思の固さを確かめる目。

「……もちろんです。早くしないと手遅れになるんでしょう？」

色の薄い唇が動き、少女が答えます。

「……」

何も言えない様子の男。少女が彼に背中を向けたまま、数秒が経過しました。

ゆっくり、ゆっくりとお辞儀をする男。深々と、一生分の忠義を相手に示すかのように。

「では、お供いたします」

ウウウウウウウン……

機械が低く唸ります。そして……。

そして……。

二人の少年がたどり着いた先は港のはずれ、レンガで作られた崩れかけのトンネルだった。

オーヴィルが慣れた手つきでバイクを操り停車させる。そのままトンネルの中に駆け込もうとしたが、ウィルバーが引き止めた。「ちよつと待て。こいつを隠しておかないと」

二人はエンジンを止めた車体を入り口脇の物陰に押し込む。

型は古いが手入れは丁寧に行われているようで、盗品となった白バイはスルスルと滑らかに砂利道を動いてそこに収まった。

「どうして隠したりするのさ？」

首を傾げるオーヴィル。頭のベレーと一緒になつてずれた。

「リリーに見つかったら面倒だろ。そうならないように、明日中にはパーツごとにバラそう」

ウィルバーの答えに納得が行った様子でオーヴィルは大きく頷くと、念には念をと捨てられていたドラム缶を目隠しにしようと押し始めた。一人では動かなかったのでウィルバーも手伝う。

ガリガリ。ガリガリ。錆びた缶の底が砂利と擦れる。

顔を真っ赤にして押すオーヴィルを見て、なんだかウィルバーはおかしくなってきた。

いくらバイクの操縦に長けているとは言え子供は子供。腕力もまだまだ足りないようだ。もしかしたら急カーブ時のハンドルではかなり無理をしているかもしれない。やはりまだ自分が運転した方が良さだろうか？

しかし、実際のところ自分には運転よりも修理やメンテナンスの方が向いている。試すのが怖くてやったことは無いが、今自分とオーヴィルでレースをしたら確実に自分が負けるだろう。

無理させない程度に頑張ってもらうか。そう考えながら押しているうちに、ドラム缶は綺麗に白バイを隠してくれた。これなら家の入り口からはまず見えない。

「これでよし！」

ガッツポーズをして、トンネルの中へ駆け込んでいくオーヴィル。ちらりとバイクに目を遣った後、ウィルバーも後に続いた。

戦時中、港の職員用の緊急防空壕として作られたこのトンネルは、なだらかに地面の下へと向かっている。当然海側には掘り進められないから、トンネルを行くと方角的にはほとんどスワープの街の中心へ向かっていく事になる。もつとも、そんな先まで行く必要の無いウィルバーには関係の無い事だが。

入り口から三十メートル程の壁に大きめの扉がある。錆びだらけだが堅牢な印象のその扉が彼らの家の入り口。そこまでの間のトンネルには布をかけられた何かの機械や、ジャンクパーツが無造作に置かれている。

それらの間を器用に通って扉の前に立つ二人。オーヴィルが背伸びをしてドアの真ん中のノッカーを何度も鳴らす。無反応。

「相変わらず下手だな。貸してみろ」

少しむくれてウィルバーにドアの前を譲るオーヴィル。

コン、ココ、ココ、ココ、ココ、ココ。

カチャリ。何かが外れる音がした。

「いつも言ってるだろ。『幸せなら手を叩こう』のリズムで叩くのがコツだ」

「なんでそんな面倒な仕掛けにしたのさ？」

「知るか。ポルカのおっさんに聞け」

無造作にドアを開けるとオーヴィルを通してからウィルバーは再び扉を閉じる。ギィと低い音を立てたドアの内側にはオルゴールを

思わせる箱が取り付けられていて、閉まると同時にカチャリと鍵を自動でかけ直した。

「本当、無駄な力ククリ細工ばかり上手いんだよな、あのおっさん」

「聞こえとるぞ」

声で振り返ると背後に背の低い老人が立っていた。

汚れた白衣に禿げた頭、額に分厚いレンズの眼鏡を乗せている。

一見すると立ったまま居眠りしているようにさえ見える細い目がウイルバーを睨みつけていた。

「い、居たのか、ポルカ。機海^{きかい}から今日は帰らないって言ってなかったか？」

思わず後ずさりをし、言葉を詰まらせるウイルバー。

「ちよつとしたトラブルが起きての。目当ての品が取れなかったんじゃない」

「トラブル？」

「後で話す。それよりもう夕食の時間じゃ。早く降りないとリリーにどやされるぞ」

言い残してポルカ老人は入り口のすぐ脇にある急な階段をゆつくりと降りていった。分厚い靴底と階段がぶつかる音が等間隔で遠ざかっていく。

ポルカの言う「トラブル」も気になったが、それ以上に腹ペコだったのでウイルバーも大人しく階下へ降りる。もう少しだけ深く、街の地下にある彼らの秘密の住処へと。

彼らが暮らすこのトンネルの中の隠れ家は大きく分けて二階層に分かれている。

仕掛けの施された入り口のある上階は主に工房。壁や天井には水道管や電気ケーブルなどの街のライフラインが張り巡らされており、

そこから電気を無断で拝借して作業をしている。拾ったりポルカが買ってきた材料を元に機械類の修理や調整をして、生活費に当てているのだ。

白衣を着た背の低い老人——ポルカ・ドット博士はこの街では有名なエンジニアであり、機械のトラブルが起きれば街中どこへでも駆けつける。ウィルバーはその弟子として現在勉強中。しかしポルカが得意とする細やかな機械仕掛けよりも、他の事に心酔気味だ。

一方、階下は居住区域。キッチン、ダイニング、ベッドルーム、風呂など必要最低限の設備が地下の穴に無理やり詰め込まれている。このトンネルの横穴自体がどうやら戦時中、防空壕に逃げ込んだ重要人物を一般人の目から隠すために作られた物らしく、ポルカが改装する前からある程度住める状態にはなっていたそうだ。特に誰の許可も取っていないが、咎められた事はないからと暮らしている。

階段を降りてすぐのダイニングスペース。その入り口で不穏な空気を感知取ったウィルバーは足を止めた。

部屋の中でオーヴィルが立ち尽くしている。冷や汗を流し、目に涙を溜めながら。

そしてその前には……。

「何度言ったら分かるのよ……」

一文字一文字、区切るようにしてリリーが言った。

——やべえ。もしかしてバレてるのか？

リリーの説教の餌食になろうとしている小さなオーヴィルに心の中で謝り、ドアの影に身を潜めるウィルバー。

「な、な、何もしてないよ姉ちゃん！ 本当に本当に何もしてないよ」

ガタガタと震えながら自分と同じ明るい金髪の少女を見上げるオーヴィル。少女のブルーの瞳は怒りで燃え上がり、いたいけな少年

を焼き殺しかねない程だ。

ドン！ ダイニングテーブルの上にリリーが何かを置く。

「じゃあこれは何？」

しまった…… どうして隠しておくのを忘れたんだ！ オーヴィルは聞こえないように舌打ちをする。

リリーが置いたのは置時計のような機械。周波数を合わせる捻りとスピーカーは付いていて、どうやら無線機のようなようだ。

スピーカーから擦れた声が聞こえてくる。

「こちら追跡班。埠頭近くでホシを見失った。盗まれた車両も見つからない」

「了解。ホシは十代の少年二人組み。背の高いほうが赤毛で小さい方が金髪に帽子だ。服装からして孤児の可能性が高い。発見しだい確保せよ」

「了解。搜索を続ける」

通信が切られると同時に、耳が痛くなるくらいの静寂が地下室を包み込んだ。

誰も動かない。息すらしない。

ポタリ。オーヴィルの頬を伝って落ちた冷や汗が開始の合図だった。

「あんたたち警察の車盗んだわね！」

リリーが吼える。今度は逆の意味で耳が痛くなりそうだ。

オーヴィルはその迫力だけでもう限界。一気に泣き出して、ごめんなさいごめんなさいと繰り返す。

ふん、と顔をそむけるリリー。甘やかそうという気は一切感じられない。

「ウィルバー、出てきなさい」

矛先がウィルバーに向いた。

「……」

「今すぐ出てこないと、ここの場所を通報するわ」

「待ってくれ！ そりゃ困るだろ！」

慌てて姿を現すウィルバー。既に彼も全身冷や汗まみれだ。

「あら、私も博士も一向に困らないけど」

横目でテーブルを見ると、何食わぬ顔で席に着いたポルカがスープを飲んでいた。一緒に置かれた例の機械は黙ったままだ。

——どうせこの警察無線傍受用機をリリーに教えたのもポルカのおっさんだな。

どうしてもジャンクでないガソリンエンジンが必要だったウィルバーとオーヴィルは、数日前からこの機械を使って警察の無線を盗み聞きしていた。ウィルバーの完全な手作りだが思いのほか性能は良く、地下であるこの部屋でも無線電波を受信できる程だ。

この装置で盗み聞きした情報を元にターゲットを白バイ部隊のバイクに定め、パトロールから帰ってくる時間を狙って計画を実行したのだ。

リリーが日焼けした腕ごと指をウィルバーに突きつける。

「警察が来て困るのは、あんたら泥棒二人だけよ！」

タンクトップからすらりと伸びた腕から放たれるビンタが、少女とは思えない威力を発揮することをウィルバーはよく知っている。

「待ってくれ、まずは話を聞いてくれよ。これは仕方のないことなんだ」

「はあ！？ 仕方がない？ 盗みが？ 人様の物を勝手に持ち出すことが？」

台詞に合わせてジリジリとリリーが迫ってくる。壁際に追い詰められた。もうすぐビンタの射程範囲に入ってしまう。

「リリー！ お前の言う事は正しい！ だが正しいことがいつも人を救うとは限らない！」

「牢屋でほざいてなさいよ、この人でなし！」

ヒュン！

放たれた腕を紙一重でかわした。

「なんでウィルはいつもいつも悪事にオヴを巻き込むわけ？ 私の弟があんたみたいな人間になったら責任取ってくれるわけ？」

「お前はもう少し弟離れした方が良く！ 過保護から抜け出したい年頃なんだよオヴは！」

「な？ とオーヴィルに視線を送るが、泣き続ける少年にウィルバ―の声は届かない。」

だが、代わりに意外な方向から援護射撃が入った。

「その辺にしてやれ、リリー」

ポルカだった。飲み終わったスープの皿にスプーンを置き、落ちていた眼差しでリリーを見つめる。

——なんでポルカのおっさんが？ いつもなら黙って見ているのに。

皿を持ち、流しへ運んで水を張るポルカ。

「盗んだバイクはわしの方から後で返しておこう。警察にはコネがあるからなんとか許してもらえんじやろう」

「でも博士！ こいつらは犯罪を」

食い下がるリリー。

「リリー。実はわしは今ウィルバーが居なくなると少々困ってしまふのじゃ。わしに免じて許してやってくれんかの？」

「……」

言い方は優しいがポルカの言葉の裏には曲げようの無い意思があり、流石のリリーも黙った。

ポルカがウィルバーとオーヴィルに手招きする。

「おいで。リリーの料理を食べながら聞いてくれ」

さっきまで言い争っていた相手の手料理を食べるのは少々ばつが悪かったが、素直に従った。途中、ようやくすすり泣きになったオーヴィルの肩をテーブルまで押してやる。

リリーがやや乱暴にスープ皿を二つ置くと同時に、ポルカは話し始めた。

オーバーリープな出会い

翌日。朝七時半。

ウィルバーはポルカに頼まれた仕事の為に、隠れ家の扉を開けてトンネルに出た。

工具の棚や壊れたバッテリーが無数に積み上げられたトンネル内部。この入り口周辺の物品は全てウィルバーが独自に作っているある物の為にある。

外の砂利が進入してきているコンクリートを踏みしめながら、工具の山の間に安置されたそれに近寄る。小奇麗な白い布がかけられたそれは、辺りの暗い配色の工具の中でよく目立ち、まるで灰色の雲の切れ間から突然現れた太陽のように見えた。

「俺とこいつの初仕事か」

徐々に高まってくる興奮で震える手をゆっくりと布に伸ばす。触れた。掴んだ。

そして一気に布を取る。——バイクだ。

銀と黒の塗装が丁寧に施された車体はピカピカに磨き上げられていて、小型でありながら重量感のあるデザイン。ハンドルもシートも車高も全てウィルバーが自分自身に合わせて作っている。

ベアシックでありながら見慣れない機構も取り付けられている。特に目を引くのがタイヤ部分で、前輪後輪ともに普通のバイクより分厚く、中心部分に幾重にもコイルが巻きつけられている。

多くのパーツはかなり前から出来ていたが、心臓とも言えるエンジンの性能だけが足りなかった。しかしそれも昨日拝借した白バイから取り付けて完成。白バイには変わりにジャンクから拾ってきたエンジンを使えるようにして付けて置いた。ついでに悪戯としていくつか追加パーツも付けたが。

「俺が考えていたまったく新しいバイク、完成だ」

思わず頬が緩むウイルバー。自分の趣味に命を賭ける者独特の微笑みだ。

ストッパーを外してバイクをトンネルの外まで押し出す。その間もニヤニヤが止まらない。

自分にしか作れない自分だけのバイク。何しろ今まで無かった走りをするマシンだ。あのオーヴィルにも扱えないだろう。

そんな事を考えながら、ついに跨りエンジンをかける。

ブルルウウン。

低く心地よいなり。段々とそれが自分の鼓動と共鳴を始めるのが分かる。

「名前は何にしようかな」

ウイルバーは胸を高鳴らせながら、ハンドルに引っ掛けてあった車体に合わせた色のペイントのヘルメットを被った。

——そして、一気にアクセル！

マシンは軽やかに朝の街へと走り出した。

「知つての通り、今日わしは機海^{きかい}へジャンク回収へ行っておった」
昨晚の大騒ぎの後、ポルカが話し始めた。

「大きめのアルミ廃材が見つかったと聞いてな。しかし手に入らなかった」

「どうしてさ？」

口の中をスープの豆でいっぱいにしてしながらオーヴィルが尋ねた。
すかさずリリーが「お行儀悪いでしょ」と叱る。

ウイルバーもスプーンを持って熱いスープの飲む。野菜中心の具材の味が程よく溶け合っている。

——料理だけは上手いんだよな、リリーは。

口の中の物を飲み込んだオーヴィルが続ける。

「機海のジャンクならクレーン屋を雇えばすぐ引き上げられるでし

よ？」

確かに機海から何かを手に入れるときは普通クレーン屋を雇う。ポル力だって日常的にそうしているはずだ。

「出来なかつたんじゃよ」

静かに言うポル力。

「ちようどわしが行く直前に大規模な崩壊があつたらしくての。目当てる廃材がクレーンで届かない所まで埋まつてしまつたんじゃ」
多くのジャンクパーツが積み重なつた機海ではしばしば崩落が起きる。人が普段入るような場所では無いから怪我人は滅多に出ないが、珍しい資材が引き上げ不可能になるのはよくある事だ。

「最近多いわよね、機海の崩落」

リリーが頼杖をつく。心配性の彼女はポル力が危険な場所に行くのを氣にかけているようだ。

テーブルの真ん中の皿に手を伸ばしながら、ウィルバーが口を開く。

「なら、諦めろよポル力」

そして皿からパンを一切れ取る。

「機海の底に落ちちまつたパーツには手を出さない。クレーン屋を雇う上での常識だ。わざわざ危ない橋渡らなくたって、そのうちアルミくらい手に入るさ」

「そうじゃな。いくら報酬を高くしても危険な橋を渡ろうとするクレーン屋はおらんじゃろう」

「そうそう」

「じゃから、お前さんに渡つてもらう」

「……は？」

ウィルバーの口からパンが落ちた。

さっぱり意味が分からないという顔のウィルバーに対し、当のポル力は至って真面目な顔のままだ。

「お前さんが今作つとるバイク、あれなら機海の底に入って行けるじゃろう？」

「……」

「むしろあの機能を見る限り、機海に入っていく為に作っていたんじゃないのかね？」

「チツ、気付いてたのかよ」

面倒臭そうに頭を掻くウィルバー。リリーとオーヴィルの二人は不思議そうに老人と赤髪の少年のやり取りを眺める。

今彼が製作中のバイクは彼専用の特別仕様。ポルカとリリーにはもちろん、オーヴィルにすらその詳細は話していない。

——このおっさん、興味無いふりして案外目が行き届いてるんだよな。

しらばくれても無駄だと判断したウィルバーは大きくため息をついた。

「分かったよ。ただし一つ条件がある」

「何じゃ？」

「無事回収できたらポルカの工房の半分を俺にくれ。正直外のトンネルしか作業スペースが無いのは辛い」

現状ウィルバーの趣味でしかないバイク関連の作業でポルカが工房を使わせる事はない。ウィルバーにはそれが以前から不満だったのだ。

少し考えたが、ポルカは許可した。

「では明日の朝、わしは先に行つて機海で待つておる」

スワープの街を海沿いに西へ。

走っている内に段々と人通りが少なくなつていき、道路の舗装も粗くなる。逆に増えてくるのは無秩序に立てられた看板の群れ。

看板はどれも工場や機械製品を扱う会社の物ばかり。この街が工業都市と呼ばれるようになってから増える一方だ。街へ陸路で入ってくる資本家を一人たりとも逃すまいと、鉄板の広告たちが軒を連

ねる。

道が徐々に上り坂になる。ここまで来ると看板の森も姿を消し、代わりに機海が見えてくる。

——きかい機海。

それは一つの入り江を丸ごと埋め立てるようにして作られた巨大なゴミ箱である。

スワープの街を海沿いに西へ行った先にあるこの入り江は断崖になっており、高さは海面から軽く見積もっても300メートル以上、底が見えないのでおそらく実際はもっと深いのだろう。

なぜ底が見えないのか？ 答えは簡単だ。

どこを見ても鉄鉄、鉄。小石サイズの歯車から建物の鉄骨らしき物まで、ありとあらゆる大きさや種類の機械パーツが円柱型の入り江に積み重なっているのだ。

アオイ社の登場によって劇的なスピードで進化した機械技術。しかし進歩するという事はすなわち古きを捨てるということであり、当初多くの旧式機械が廃棄された。

当然スワープのゴミ処理システムが追いつける速度ではない。ジャンクの捨て場所に困った人々はいつしか街外れの入り江に機械を捨てるようになった。

地形が険し過ぎる上に魚も少ない、漁業では一切使われていない入り江だった。街の者達のそこに対する知識はせいぜい海で溺れた人間の亡霊が出るという噂程度。

「自分が少し捨てるだけだ」「少しだけなら問題ないさ」。皮肉なことにそう考えたのは一人だけではなく、あつと言う間に入り江の海底にジャンクが積み重なり、海面まで顔を出した。

それでも人々は捨てるのをやめなかった。カラクリ技術で機械は数年の内に次々と新しくなり、次々と捨てられて行く。

やがて入り江のリサイクルできる廃材をクレーンで吊り上げ売る、「クレーン屋」と呼ばれる職業まで現れた。今やスワープの手工業

の材料の八割近くは入り江からのリサイクルで支えられている。
誰が最初にそう呼んだのかは知らない。しかし今では誰もがそう
呼んでいる。

——機械で出来た海、機海きかいと

入り江の断崖に張り付くようにして立てられたいくつもの小屋。
それらは全て崖に沿った鉄骨の足場で繋がっており、多くの小屋
の傍には工事用のクレーンを長く巨大にしたような装置が取り付け
られている。クレーン屋の小屋だ。

「遅かったのう」

ウィルバーが馴染みのクレーン屋の前でバイクを泊めると、小屋
の窓からポルカが顔を出した。

「ポルカが早すぎるんだよ」

ヘルメットを取り、地面に足を降ろしながら言うウィルバー。
小屋に入ると厳いつい体格のクレーン屋店主が腕組みしていた。

「ようウィル坊。久しぶりだな」

ウィルバーの頭をゴツゴツした手で撫でてくる店主。

ポルカやウィルバーがいつもリサイクル用の資材の引き上げを頼
む店なので既に顔馴染みだ。もっとも、大雑把な依頼なら電話だけ
で済んでしまうので、こうして会うのは確かに久しぶりだ。

ウィルバーも同年代の子供の中では背が高いほうだが、岩山に足
が生えたような店主相手だと小さな子供のように頭をガシガシとや
られる。

「親父さんも。商売の方はどう？」

「最近の崩落が激しくてな。アームが壊れ通しで上がったんだよ」
機海の廃材は秩序立てて積み重ねられているわけではない。人が
勝手に捨てていくだけだから少しの衝撃で大規模な崩落が起きる。
参った、という風に顔をしかめる店主だが、すぐに思い出したよ
うに神妙な顔つきになった。

「ところでウィル坊。ポルカ博士の言う事は本当か？」

「機海の中に入る方法のこと？」

「そうだ。そんな簡単に底まで行つて廃材回収されちゃあ、ますます商売上がったりなんだが……」

「安心してよ。今回は特別に俺がポルカの頼みを聞くだけ。これからも親父さんの事は頼りにしてるよ」

不安そうな顔を続ける店主にウィルバーは例のアルミ廃材の細かい位置を尋ねた。

「座標的にはここなんだが……これだけで分かるか？」

レーダーのような装置の一点を指差して言う。半球状になったモニターには立体的に表された機海のミニチュアが映っている。

見る限り、目当てのジャンクは機海の中層・東側にあるようだ。

「大体分かった。後は無線で親父さんが細かく指示をしてくれれば平気さ」

「ならこれを持ってけ。普通の無線じゃ金属だらけの機海の中じゃ電波が悪くなる」

投げてよこされたヘッドセット形式の無線を装着し、ウィルバーがドアを開けた瞬間だった。

ビビビビ……バリイイイイイイ！

空に稲妻が走った。

いや違う。稲妻が走っているのは空ではない。

もっと低く、手を伸ばせば届きそうな距離。入り江の断崖の天辺より少し高いくらいの位置で雷のような物が光と音を放っている。

「……なんだ？」

注視しようとしたが強い光でその中心はよく見えない。そうしている間に光も音も強まっていく。

雷鳴に混じってがやがやと人の声も聞こえてくる。突然起きた謎の現象に機海中のクレーン屋が動揺している。

「どうなってんだ、ウィル坊！」

「俺に聞かれたって分からねえよ！」

ウィルバーは慌てて出てきた店主に怒鳴り返す。音が大きくてそうしないと声が届かない。

やがて風も吹き始める。まるで雷の中心から流れ出してくるような強い風。

ギギイ。機海上部の鉄骨が軋^{きし}む。

「まずい！ 崩落するかもしれない。俺は他のクレーン屋連中に今すぐアームを引き上げるよう伝えてくる」

ピシヤリとドアを閉める店主。窓越しに無線機で何か叫ぶ姿が見える。

その横にはいつも通り黙ったまま事の成り行きを見つめるポル力が居た。だが、今のポル力の様子はなんだかおかしく、大きな動揺を抱えているように見えた。まるで受け取ったプレゼントの包み紙を興奮した手つきで取っていく子供のような顔。

そして突然、雷が消えた。

途端に静寂が世界に戻ってくる。

しかし全てが元通りというわけでは無かった。入り江に居る全ての者の視線が先程まで雷が走っていた空中に注がれている。

白いブラウスに真紅の細いリボン。そこだけ重力が無いかのようになわりと浮かんだ黒髪。

「……女の子？」

浮かんでいたのは間違いなく少女だった。直立の姿勢で目を閉じたまま空中に立っている。

ウィルバーはゴシゴシと目をこすり、これが幻覚でないことを確認する。ついでに頬もつねってみた。

それでも少女はそこに浮かんでいる。

——本当、どうなってるんだ？

そして、ただでさえ意味の分からない事態が更に悪化する。

少女が――落ち始めたのだ。

オーバーフローの連続

——ズワープ市街中心。アオイ・モーターズ本社。

コンコンコンコン。

かなり焦った調子で社長室のドアがノックされた。

「入りたまえ」

デスクに向かって報告書のチェックをしていた男——ヨシノブ・アオイは書類から目を離さないまま言った。

失礼します。と控えた声で言いながら黒スーツに身を包んだ男が入ってきた。ヨシノブの秘書の一人である。

「どうしたんだね？ 会議の時間にはまだ早いはずだが？」

「社長。緊急の報告です」

落ち着こうと勤めてはいるが、秘書の声は動揺を隠しきれていない。眼鏡越しの目にも焦りの色が見える。

大きく息を吸い、言った。

「——鍵の、スぺアの鍵の反応が確認されました」
スッ。

それまで口こそ開くものの、秘書など居ないかのように作業を続けていたヨシノブの顔が上がった。同時に手も止まる。

「……それは本当か？」

「間違いありません」

「……」

しばらくの間、ヨシノブは口元に手を当てて深く思索した。沈黙が秘書に重くのしかかる。

ヨシノブは普段激昂して怒鳴るような男ではない。しかし決して温厚な雰囲気放っているというわけではなく、どちらかと言えば研究者がマウスの一挙一動を見逃すまいとする、あの威圧感をまとった男だ。

今、その威圧感が高まっている。数メートル離れたこのドアの前からでも肌がビリビリとするほどに。

「……回収しろ」

ゆっくりと言うヨシノブ。

「も、持ち主は？」

「そいつもだ。抵抗するなら多少手荒い真似をしても構わない」

「了解しました！」

逃げるように部屋を後にする秘書。部屋には再びヨシノブが一人残された。

もう彼に書類仕事をする気は無くなったらしい。乱暴に紙とペンを机の脇に退け、手を組んで考え込む。

「ジンナイ……裏切ったか」

彼の胸の内は信頼を置いていた部下への怒りで燃え上がっていた。あくまで顔は冷静なままに、ヨシノブ・アオイは激昂していたのだ。

その落下はあまりに軽やかで、まるで雨樋あまどいに吸い付いていた雫がポタリと水溜りに向かって行くような、自然でスムーズなものだった。

誰もがポカンと口を空けたまま見ている。眼球だけが動いて少女の落下する軌跡を追い、当の本人は目を瞑ったまま機海の廃材の中へと真つ逆さま。

「……！」

考えるより先に体が動いていた。

ウィルバーはヘルメットを被るのも忘れてバイクに跨った。そしてエンジンが温まるのも待たずに走り出す。

「おいウィル坊！ どうする気だ！？」

小屋の中から店主の声が聞こえる。

「あの子を助ける！」

振り返らずに叫び、螺旋階段のように入り江の崖にそって作られた鉄骨の通路を下って行く。

加速。加速。加速。

それでも少女の落下の方が速い。

少女の落ちる先には丁度先が鋭く尖った長い鉄骨。このまま行けば数秒後には間違いなく串刺しだ。

——まだ一度も試してないけど……やるしかない！

かなり長く下った。もう位置的には機海の入りに近く、捨てられた鉄ハシゴがウィルバーの目の前まで伸びている。

素早く足元に設置したレバーを軽く蹴ってスイッチを入れる。

ブォウウウウン。

バイクの車輪の中心に取り付けられたコイルに電流が流れ出す。

同時にマシン全体がギュツと足場に吸いつけられるような感覚。

——……行ける！

自作のシステムの成功を確信したウィルバーは90度ハンドルを切り——入り江の中心に向かって飛び込んだ。

「坊主——！」

はるか頭上から店主の叫び。

崖にバイクごと飛び込んだウィルバーは重力によってジャンクの山の中に墜落——しなかった。

世界が反転している。

俺の頭の上には地獄の針山みたいに尖った廃材が連なっていて、俺の脚の下には円形にくりぬかれた空と親父さんの小屋が見える。

反転しているのは世界じゃない。俺の方だ。

俺とバイク。俺たちは今ジャンクの山から飛び出した、錆びたハシゴの上を——いや、下を走っている。

バイクの前輪と後輪に取り付けたコイルに電流を通すことで、その間だけ車輪は「電磁石」になる。

これこそが俺が一年以上かけて作った俺だけのバイクの秘密。ポルカが言っていた通りこの機海の中に入っていく為に作った機構だ。このバイクなら、鉄があればどんなに入り組んだ地形やジャンクの中でも入っていける。狭いジャンクの間も通る事も想定してギリギリまで小型化だっけした。

ハシゴが途切れる。

即座に俺は磁力を切って車体ごとジャンプ。

ハシゴは衝撃で更に下層のゴミの中に落ちていったが、俺はスムーズに捨てられたダンブカーに飛び移った。

鉄骨、ネジの山、巨大な歯車。次から次へと足場を変えていく。その全てが鉄。俺のバイクならどこだって走れた。

少女の方もどんどん鉄骨に近づいている。間に合うか！？

大きな鉄板に向けて俺は加速した。アクセルは全開！

マシンが最高速度に達するのと、鉄板が途切れるのが同時だった。俺はまた磁力を切る。

鉄板をジャンプ台代わりに俺とマシンは宙に飛び出した。山なりに弧を描いて、フルスピードのまま。

お願いだ！間に合ってくれ！少女の華奢な体が今まさに鉄骨に貫かれようとしている。

どこの誰かも知らない。どうやって雷の中から現れたのかだって分からない。

でも俺はその子を助けたかった。その一心で手を伸ばす。

——掴んだ。

柔らかい。それが最初の印象だった。

東洋人らしい顔と綺麗な黒髪。まるで抱きしめただけで折れてしまいそうな細い腰。

その子の体を両手で抱えながら、俺は感動に近い感情を感じていた。もしかしたら感動していたのかもしれない。

いや、多分あれは酔っていたんだ。白馬ならぬ電磁力バイクに跨ってお姫様を助ける、夢物語に出てきそうな状況に酔っていたんだ。

レバーを蹴って磁力をオンにする。彼女を貫こうとしていた鉄骨に吸い付く車体。

俺たちは蝶の蛹のように横向きに鉄骨にくっ付いた。

「おい、大丈夫か？」

声をかけると少女は微かに息を漏らした。やはり今まで気絶していたらしい。

「んん」

「良かった。無事みたいだな」

少女が目を開く。アーモンド型の綺麗な目がすぐ近くで俺を見た。

「ここは……私は……？」

辺りを見渡して状況を把握しようとする少女。しばらくそうしていた後、ようやく自分が俺にお姫様だっこされている事にお互い気付いた。

「あ！ わ、わ、私……」

「ごめんごめん！ い、今放すから」

「放さないで！ 落ちます！」

釣られて俺も動揺してしまっただよう。取りあえず適当なジャンクを伝ってクレーン屋まで戻った方が良さだろう。

「俺は今から両手使って運転するから、しっかり掴まってろよ」

蚊の鳴くような声で返事する少女。どうやらかなり恥ずかしがり屋らしい。

始終ドギマギしたまま、俺と謎の少女は親父さんの小屋を目指して走る。

突然誰かが目の前に現れたのは螺旋状の足場まで戻ってきた時だ

った。

「その娘を渡してもらえますかね」

黒のスーツに黒縁のメガネ。髪まで黒いからまるでカラスのような男。

顔からしておそらくジパング人。細い目は一見紳士的な印象を与えるが、俺はその奥に何か不愉快なものを感じた。

誰もが機械油や錆びで汚れた服を着たこの機海の中で、その男は非常に不自然。

「近頃は突然現れるのがジパングで流行ってるのか？ ていうかお前誰だよ」

「シンドウと申します。余計な話是要らないんですよ。その娘を早くこつちへ」

次から次へ、目まぐるしく起きる出来事に俺の理解が追いつかない。

振り向いて、バイクの後ろの少女に尋ねる。

「知り合いか？」

「……いいえ」

少女は俺の背中に隠れながら、シンドウを見て言った。

「——だそうだ」

俺はわざとニヤリと笑ってみせる。

全体的にこの男が気に入らなかった。少女の事を物のように扱う態度とか、俺のことは見る見下した目とか。

俺はアクセルを入れてシンドウの横を駆け抜ける。

「そうですか……」

すれ違う瞬間、真横で呟くのが聞こえた。

「なら、力^かずくで頂きます」

突然空が翳^{かげ}った。足場の鉄板の茶色が暗くなる。

雲でも出てきたのかと思って俺は気にもとめなかったが、背中の少女が叫んだので上を見る。

「上です!」

ガシャーン!

間一髪、避けられた。何かがさっきまで俺らの居た足場に降ってきたのだ。

あれは……。

壁面に当ってバランスを取っている太い腕、着地の衝撃でグニャリと曲がった鉄板を踏みつけている脚。全長は2メートルくらいでシンドウの服と同じで真っ黒なペイントだ。

「ロボット……ですか? あれ」

俺はあれの正体を知っていたが、首をかしげる少女に説明している暇は無かった。とにかくここから逃げなくては。

今日で何度目になるか分からないフルスロットルで走り出す。

「逃がすな!」

シンドウがロボットに指示を出すと、巨体からは想像も出来ないスピードでロボットが追ってきた。

本当に今日は訳分らない事だらけだ。女の子が雷の中から降ってくるわ、その後はロボットが降ってくるわ……。

「なあ、君」

「わ、私ですか?」

「他に誰が居るんだよ」

この女の子、照れ屋なだけじゃなくぼんやりもしてる。

「本当にあいつと関係ないのか?」

「無いですよ! 私はシンドウなんて人知りませんし」

「……そっぴや名前聞いてなかったな。俺はウィルバー・ボーダース」

名前を聞くときはまずこちらが名乗るのが礼儀だ。

その時俺は思いもしなかった。次の瞬間少女の口から衝撃的な名前が口にされようとは。

「レオナです。この国風に言えばレオナ・アオイと申します」

思わず急ブレーキをかけそうになった。

……アオイだって！？

オーバーランな追跡

アオイ。

スワープに住む者、いや機械産業にたずさわる者なら誰でも知っているその名前。

まさかこの子……アオイ・モーターズと関係が？　しかしそう考えると目の前のロボットの説明が行く。

「グリズリー」。それが今崖の上から落ちてきたロボットの通称だ。正式名称は「safekeeper mk-2」と言い、アオイ社が作成及び管理している警備マシン。

見上げるような体躯と生身の人間では一溜まりも無い腕力、ずんぐりとして黒くペイントされた胴体が特徴のこのロボットは遠隔操作式で、アオイ・モーターズ本社からコントロールされている。使用目的は本来アオイ社ビルの警備なのだが、最近では市内警備を名目に街中でも見かけるようになった。

グリズリーのパイロットはアオイ社に害をなす者を見つければ即座に遠隔操作で捕縛する。安全の都合上銃火器は一切搭載されていないが一度捕まったら最後、警察に引き渡されるかアオイ社ビルに連れ去られる。

言わばアオイ・モーターズの私設兵団であり、この街の住人が最も関わり合いになりたくない物。

「詳しい話は後にしよう、今はこいつをなんとか巻いてみせる！」「お願いします！」

大きくアクセルを入れ、クレーン屋の小屋をいくつも通り過ぎながら入り江の上を目指す。

もちろんグリズリーの方も黙って見ているわけでは無い。エンジン音を唸らせてスロープ状の足場を追ってくる。しかしその巨体が災いして狭い場所では大したスピードが出ないようだ。

平地に出たら追手も速くなる。おそらくスピードは互角。今の内

に少しでも距離を開けておきたい。

悲鳴を上げるバイクのモーターに鞭を打って更なる加速。入り江の形は円形なのでカーブも常に一定、曲がりきれなくなる心配は無い。

そう考えたとき、行く手の小屋から誰かが出て来た。よく見れば顔なじみの親父さんの小屋で、出て来たのは……ポルカ！

「ポルカア！　そこ退け！」

ポルカは相変わらずの無表情だった。避ける気は無いかのように俺たちから横の方を向いて棒立ちしている。

くそ！　俺が避けりゃ良いんだろ避けりゃ！　最短距離で避ける為に少しだけステアリングで軸をずらす。

俺たちのバイクがポルカの背中側を通り抜ける瞬間、

「工房は好きに使え」

小さな声だったがはつきり聞こえた。

思わず振り返るが既にポルカははるか後方で……自分の横を通り抜けるグリズリーにも気付いていないかのように棒立ちを続けていて……結局どんな顔をしているのかは分からなかったんだ。

入り江から出た。遠くに看板群が見える。

来た時より風が強くなっていて、海辺の荒れ地には砂埃が舞っている。

「スワープ市内まで戻ればいくらでも捲ける。それまでしっかり捕まってるんだ！」

「はい！」

「乗り物酔いはするか？」

「平気です！　ジェットコースターとか大好きですから」

レオナは大分バイクに慣れて来たらしい。ミラーで見ると表情に余裕があり、返事もこれまでよりハキハキとしている。

俺には「じえっとこーすたー」なる物が何なのか分からなかったが、乗り物の類なのだろう。コップの下敷きにジェットエンジンが

付いて高速で空を飛ぶのを想像したが、きつと違っただろうな。実在するとしたら恐ろし過ぎる。

ズシン……。

重量感のある音を立てて崖からグリズリーが姿を現した。

そして太い両腕を地面に付け、二足から四足に変わって走り出した。すさまじく速い。

四足で土煙を上げながらこちらを追って来るその姿はまさに動物図鑑で見たグリズリーその物。図体の割に素早いとは厄介極まりない。

一計を案じて道路を外れ、看板の森の中へ入って行く。

「さすがにこの中までは追ってこれ——」

背後で爆音がする。俺とレオナが振り返るとまるでウエハースか何かのように金属製の看板を踏み倒しながら黒い機械が走っていた。

「——追って来たあああ！」

二人の絶叫が重なった。

なんとしても奴はレオナを連れ去るつもりらしい。街へ入ったらすぐ逃げきらないと本当にまずい。

一見無意味に見えた看板も少しはグリズリーのスピードダウンに役立っただけ、街まで辿り着いた。

「すごい……」

レオナが息を呑む。

街中に立ち並ぶ工場の数々。壁や建物の間を縦横無尽に大小様々なパイプが張り巡らされ、道路には馬車の横を自動車を通り過ぎて行く。

中世の頃から残る石畳にはタイヤ痕が黒くこべり付き、家々の屋根からは白や黒の煙が立ち上る。

そんな光景が360度のパノラマで広がっているのだ。初めてこ

の街に来た人間は誰も同じような反応をする。文明の力に感銘を受けているのか、古今が混ざり合ったちぐはぐな様に呆れているのか、俺には判断が付かない。

「観光案内なら後でしてやるよ」

「え、あ、ありがとうございます」

すっかり自分だけの世界に入り込んでいたらしい。レオナはビクツと体を震わせた。

「ここ……本当に十九世紀なんですよ？」

「ここ、って……世界中どこだって十九世紀だろ」

「あ！ ええ、まあそうですね」

さつきから微妙にレオナと会話が噛み合わない。初対面同士で会話が弾むような事の方が珍しいだろうが、この違和感をもっと違う何かのような気がする。

俺がレオナに尋ねようとした瞬間、見計らったようにグリズリーが曲がり角の向こうから姿を現した。先回りしていたらしい。

「ちっ！」

迷わず足元のレバーを蹴る。

電磁力を纏ったまま近くのアパートの壁へ方向転換。

「ちよつと！ あつち壁ですよ！？」

「良いから黙って捕まってる！」

レンガの壁が迫る。

接触する直前、軽く前輪を持ち上げて俺は車体をアパートの雨水パイプに接触させる。思った通り、軽やかにマシンはパイプのに沿って垂直な壁を駆け上り屋根に着いた。

「な？ 大丈夫だろ？」

バイクを操って屋根から屋根へと飛び移って行く。

パイプを、車の上を、壁を、看板の裏を、鉄のポールを俺たちは走って行く。

「ここは鉄の街スワープだ！ 俺のバイクに走れないところはねえんだよ！」

磁力に乗って、バイクはしなやかに追手を翻弄する。

「……ラットランナー」

ポツリ。後ろのレオナが呟いた。

「え？」

マシンを駆る事に夢中になっていた俺はそれを聞き逃した。

「このバイクの事。さっきからどどん街中を抜け道ラットランに使って行くでしょ」

なるほど、なかなか良い響きだな。

ふと見下ろすと、屋根の上の俺たちを取り囲むようにいくつものグリズリーが道路を並走している。一体目のパイロットが増援を呼んだらしい。

あつと言う間に数が増えてざつと五体。道行く人々は啞然として俺とレオナとロボットの群れが通り過ぎて行くのを見ている。

ロボット達は躊躇ためらっていた。屋根に上ったりすれば彼らの巨体なら建物を壊してしまうだろう。アオイ社の警備ロボットが街を破壊する絵はイメージ的によろしくないはずだ。

このまま走っている俺たちも埒が明かない。意を決して俺は街のある一画を目指した。

アオイ・モータズ自動車部門工場。その広大な敷地の中に俺とレオナはバイクで降り立った。

早速正面から二体飛び込んできた。工場の壁に張り付いてかわす。そのまま屋根の上へ。

自分の会社の工場ならいくら壊しても問題ないと考えたのだろう。今度は壁を走るパイプを握力でひしゃげさせながら次々によじ登って来た。

伸ばしてきた腕を軽いターンで避け、工場の建物同士を繋ぐパイプの上を走って次の棟へ。

予想通り向かった先の屋根の上にはグリズリーが三体待ち伏せしていた。俺はスピードを緩める事無く突っ込んで行く。

背後からはパイプを踏み壊しながらさっきのグリズリー。前方に

はこちらも突進を始めた三体のグリズリー。

パイプラインという一本橋の上で俺たちは挟み撃ちされようとしている。

両側のグリズリーが同時に俺たちに向かって飛び込んだ。レオナが後ろで悲鳴を上げる。

「行くぞ！」

俺は体を右に傾けてバイクをパイプの上で滑らせた。電磁力はオンにしてある。

くると半周した俺たちはパイプの下に貼り付きながら、上方で重い機械同士が激しくぶつかり合う音を聞いた。間を置いて、体が派手に砕けたグリズリーが五体地面に落ちる。

「少々古典的過ぎません？」

髪をだらりと下げながらレオナが言った。バイクごと逆さ吊りになっている俺たちにはお互いの髪が突風でも受けたかのように逆立って見える。

「引つかかる方が悪いんだ」

俺は肩をすくめて見せようとしたが、今手を離したら落ちる事を思い出してやめにした。

追手を撃退したとは言えここは敵陣と真ん中だ。すぐにでも離れた方が良さだろう。

だが、レオナが口を開いたので俺は自分の口を閉じる。

「……一つ聞いても良いですか？ ウィルバーさん」

「何を？」

「この街……この世界ごとなんですかね。おかしいとは思わないんですか？」

「おかしいって……何が？」

「主に機械に関して」

「今時バイクも車も珍しくないだろ？ ロボットはアオイ社の最先端技術だから例外だけだ」

俺はいよいよ肩をすくめなくなった。このジパングの少女は一体

何を言いたいんだ？

ここまで全て逆さに張り付いたまま。少し頭に血が上って来た。

「この世界の機械技術は、私が知ってる産業革命期と違うんです」

レオナがじつとこちらを見つめている。俺の顔が赤くなつたのはきつと逆さ吊りのせいだ。

「ウィルバーさん。驚かないで聞いて下さいね」

「今日はもう半年分は驚いた。もうこれ以上驚く気にはならないね」

レオナは大きく息を吸った。

そして言葉と共に吐き出す。

「私、未来から来ました」

ここまで全部、俺たちは逆さ吊りのまま。

反転したスワープの街のと真ん中で俺はどんな顔をすれば良かったんだろう？

オーバーロードな現実

父がまるで別人のように変わってしまったのは、母が死んでからです。

私が六歳の時、今から八年前の事でした。

あ……でも、「今」は十九世紀なんですよ？ だから八年前と言うか百年以上先と言うか……なんだかややこしいですね。

取りあえず八年前と言う事で。私が暮らしていた西暦2022年を基準にさせてもらいますね。

父、^{あおい}葵 ^{よしのぶ}義信は元々優秀な科学者でした。ヨシノブ・アオイと呼んだ方が皆さんには馴染みがあるかもしれません。

初めに入った日本の大学は物理学を学んで主席卒業。そのままアメリカへ留学して量子力学を学んで博士号を取ったそうです。

その影響がエリートの親にありがちな英才教育なのかは分かりませんが、私は小さい頃から英語を教えられてきました。小学校まではインターナショナルスクールに通い、バイリンガルと言っても差し支え無い程度になったとは思います。

私自身別段英語が好きなわけでも無く、ただ親の言うままに過ごしていただけです。それがこんな形で皆さんと出会い、役に立つとは思議な物ですね。

……話が逸れましたね。本題に戻ります。

日本に戻った父はすぐに国立大学で研究室を与えられるほどの恵まれた待遇を受けたそうです。そこで研究員として働いていた母と出会い、結婚しました。数年後には私も生まれます。

異例の若さで教授に任命され、毎年のように新発見で科学界を賑わわせる父。公私共に充実していて、傍目から見ても幸せそうだったそうです。

はつきりとは覚えていませんが、その時の父は私から見ても笑顔

が多く優しい父でした。父の人生の絶頂期に私は三歳。もう少し大きければ、幸せな我が家を目に焼き付けていられたのでしょうか。

当時父が研究していた内容について私はあまり知らされていません。周りの人から話を聞く限り、原子力発電の効率化と関係のあること事だったそうですが、それ以上は分かりません。多分詳細に教えてもらったとしても、私には理解できない研究でしょう。

その研究が行き詰まりました。

父は酷く焦ったそうです。本当に挫折と言う物を知らない人間だったのだと思います。

来る年も、また来る年も研究は進展しません。研究などと言う物は普通そういう物だと私は思っているのですが、父にはそれが我慢ならない事でした。

父は大学を辞めました。もちろんそんな有名教授を大学が手放すはずも無く、形上在籍し一切研究していない、幽霊教授状態と言うのが正確かもしれません。

父の功績のおかげで多くの特許や出版物の印税があつたので、私たち家族はそれまで通りの生活を続ける事ができました。

その頃から父は一人で塞ぎ込む事が多くなりました。それでもまだ楽しそうに料理をしたり、一家で出かけたりした記憶があります。けれども、積みかけるように父を不幸が襲います。

母が発病しました。白血病です。この時代にもありますよね？

え？ オーヴィル君は知らない？ とつても怖くて直すのが大変な病気なの。

白血病の治療法として有名なのは骨髄移植ですが、母は少々珍しい血液型だったのでドナーが見つかりませんでした。……最後まで母が死んだ日、生まれて初めて私は父が泣くのを見ました。

何十分も何時間も何日も。いつか目から流れ出す涙が血になってしまっんじゃないかと思う程泣いていました。母の葬式の喪主を務めるのにも精一杯の様子で。

父が泣き止んでからはまた何も無い日々が始まりました。今まで通り、ただ、母が居ないだけです。父が笑わないだけです。

母の死から半年が経った時でした。突然父が会社を興しました。実態は会社と言うより秘密裏な研究チームに近く、父は財産の全てをその研究に注ぎ始めます。

そう——タイムマシンの研究です。

タイムマシンと言ってもやはり皆さんにはピンと来ないですよ。まだこの時代ではウエルズの小説も出ていないわけです。

タイムマシンと言うのはその名の通り時間を移動する為の機械です。

え？ 時代の間を走る車？

うーん、乗り物としてのタイムマシンはよく漫画で出てきますけど、父が作ったのはどちらかと言えば大砲に近いですね。

時空間を越えられる大砲の中に人間を詰めてドカンと、特定の時代・場所に飛ばす。そんなイメージを持って頂ければ問題無いでしょう。

まあ、この説明はある人の受け売りで私もよく分かって無いんです。さつきから分からない事だらけですね、私。ごめんなさい。

原子力発電は本来父が研究したかった分野ではありませんでした。大学からの依頼で仕事と割り切ってやっていたようです。それ故に愛着が沸かなかった、と解釈すれば研究を投げ出した父も幾分ましに見えますかね。

父が何よりも興味があつたのは時間移動でした。量子力学を留学してまで学んだのもその為だったようです。

大学に打診した事もあつたのですが、「金にならない。馬鹿馬鹿しい」と一笑にふされたそうです。

全ての材料は以前から揃っていたのだと思います。時間移動への情熱。十分な資産。スポンサーを付けるだけの人脈。自由に研究できる時間。

母の死は用意された導火線に火を付けるには十分な大きさでした。

過去に戻って妻の死を止める。大真面目に父はそう言いながら研究していたそうです。

部下の研究員は父の人脈を持つてすれば容易に集める事ができました。そして研究すること八年間、ついにタイムマシンが完成してしまいました。そういう意味ではやはり父は天才だったのでしょう。私は一切父のしている事を知りませんでした。完成して父が過去へ旅立ってしまった後、以前から知り合いだった父の部下の方から教えてもらいました。ジンナイさんと言う方です。

さっきの大砲の説明は私にジンナイさんがしてくれたものです。一度にいろんな事を聞かされて混乱している私に優しく何度も説明してくれました。

時間が無い。早くしないと歴史が変わって手遅れになる。最後にジンナイさんはそう私に言いました。理由は分かりませんが父は母の病気を治療するのではなく、この産業革命期に旅立って歴史を変えようとしている、と。

え？ またオーヴィル君質問ですか？

ふむふむ……「過去に戻ってしまった瞬間から世界の歴史は変わってしまうんじゃないか」、確かに私もそう思います。例えば父が旅立った後にタイムマシンで追いかけてようとしても、父が歴史改竄を終えてしまっていれば、私は歴史が変わっている事にすら気付かないんじゃないか、と。

これもジンナイさんの受け売りですが、時間には相対的な物と絶対的な物があるんだそうです。

過去と未来が繋がり合う相対的な時間の軸とは別に、全ての時代に平等に流れる絶対的な時間があり、歴史が変わる時にはそれが関係してくるとか……すいません、私も全然分らないんです。

つまりは「誰かが過去に戻って歴史を変えてしまっても、その変化が後の時代に及ぶには間がある」って事だと思います。ややこし

いですよね。

その僅かな隙の間に私とジンナイさんは父が残したタイムマシンを使い、十九世紀を目指しました。場所も時代も全て父が行った時と同じに合わせたのですが……今は父が現れてから数年経っているんですよね？ 何故かジンナイさんも居ないし……。

私これからどうすれば良いんでしょう？

……もう、お察しだと思っています。

この世界に「カラクリ」として父が広めた機械技術は全て未来の物です。

父が何故そんな事をしているのか、まったく見当もつきません。でも止めたいんです。父が歴史を変えろという大罪を犯そうとしているのを。

でも……私はどうすれば良いんでしょう？

レオナの長い話が終わった。

話は終わったが、俺は一体どうすれば良いんだろう？

テーブルの向こうのリリーに目を向ける。途方に暮れたような、今にも笑い出しそうな、そんな表情をしていた。きっと鏡があれば同じような表情の自分の顔も見れるだろう。

時刻は四時過ぎ。今の季節なら夕暮れ前だろうか。

取りあえず隠れ家にレオナを連れてきて事情を聞いたは良いが、聞く前よりも頭の中はこんがらがっていた。

俺たちが今当たり前のように使っている機械は実は無理矢理進歩させられた物で……。

それをやった張本人は今日の前でうつむいている女の子の親父なわけで、女の子は親父を止めようとしているわけで……。

でも、もう手遅れっぽくて……。

何か言おうと口を開くが言う事が見つからず、仕方なく口を閉じる。沈黙が耳に突き刺さってまた口を開くが何も言えず、結局口を閉じる。

そんな事を何回続けただろう？ 沈黙を破ったのはリリーだった。

「……信じないわよ」

そう言ってテーブルに両手をつき、立ち上がった。

「信じないわよ！ タイムマシン？ 歴史改竄？ 馬っ鹿じゃないの！？」

レオナが一段とうつむく。

「ウィル、この子大嘘つきなんだよ。そうに決まってる。理由は知らないけど私たちをからかって遊んでるだけなのよ。早く追いついて」

いつものパターンだ。いつだってリリーの矛先は俺に向く。

リリーとレオナ、二組四つの視線が俺を突き刺す。

「……レオナは嘘を言っていないと思う」

「ウィル！」

リリーが呻いた。

「俺レオナを信じたい。突拍子もない話だったのは分かっているけどさ」

「どうしてよ！？ どうしてレオナに肩入れするの？ もし話が本当だとしたら私たちの家族は」

「黙れ」

それ以上言わせてはいけなかった。

俺がとつさに放った言葉はあまりに短く、冷たかった。自分でもこんな胸に突き刺さるような声を出せる事に驚くくらいに。

一瞬で無表情になるリリー。服に落とした氷がじんわりと溶けて水になり生地を濡らすように、そこから泣きだしそんな顔に変わっていく。

涙が溢れだす手前の瞬間の表情でリリーはしばらく俺を見ていた。

永遠にも思える数秒間の後、リリーはダイニングを走って出て行った。通った後には雫が途切れ途切れに落ちている。

俺も立ちあがった。どこでも良いからここ以外の場所に居たい。ドアを開けて階段を上る。

「ウィルバーさん……」

レオナの声も無視してしまった。リリーのあんな顔を見た後では優しい言葉も表情も、無理だ。

トンネルの外に出て港まで歩く。

スワープの街を見上げるとまた考えてしまう。

俺たちの暮らす俺たちの街。俺たちが育ってきたこの街。これがたった一人の男が捻じ曲げた空間だなんて。

なんとなく根拠も無く、俺たちはまっさらな世界に産み落とされて、そこで思い思いの自由な人生を描くんだと信じていた。でもそれは嘘だ。

嘘……と考えてまたリリーの言葉を思い出してしまう。

レオナの言葉がリリーの言う通り全部嘘だったらどんなに良いだろうか。俺たちはこれから今まで通り暮らして、世界のバックグラウンドなんて疑う必要も無くて。

こんな所で一人で男泣きする必要も無くて。

それでもレオナの言う事は本当だと思う。何も無い所から雷と共に彼女が現れる瞬間を見た以上、信じないわけにはいかない。

少しだけ自分自身を嫌いになりそうな考えをした。俺があの時レオナを見捨ててれば、機海へと落ちる彼女を黙って見ていれば、カラクリが誰の思惑の結果だろうとも関係無かったんだ。知らないままだったんだから。

背後で砂利を踏む音がした。レオナが俺と並んで立っている。

「……ごめんなさい。巻き込んでしまって」

「レオナは悪くないよ」

「ううん。話さなければ良かったんですよ。話さないでお礼だけ言
つて去れば良かったんです」

最後の方は声が小さくて聞くのがやっとだった。レオナの細い声
は波の音で掻き消されそうになる。

「ごめんなさい。私も、私も背負いきれなくて……」

そうなのだ。彼女自身も知らなくて良かった人間なのだ。

ジンナイとか言う奴が彼女に話さず、一人でヨシノブを止める旅
に出ていれば、少なくとも彼女は幸せだったはずだ。

俺は会った事もないジンナイに憎しみを抱いた。同時にヨシノブ・
アオイにも。

「もし差し障りが無かったらで良いのですが」
波の音が強い。

「ウィルバーさんのご家族って……？ ごめんなさい」

俺の顔を見てレオナは質問をやめた。

「ごめんなさい。さっきリリーさんが何か言いかけていたのでつい
……」

ここまで来たら黙っていても意味がない。

「死んだよ。この国十年くらい前に戦争やってたんだよ」

船をロープで泊めて置く金具の上に乗る、レオナから目を背ける。
潮風が気持ちいいような、鬱陶しいような。

「この街海沿いだろ？ 船で囲まれて、ドンパチ砲弾撃つて来るん
だけ。飛行船も無い時代なのに防空壕が作られるくらいやばかった
んだ」

わざとおどけるようにして手を広げて見せる。

「その時死んだよ。リリーとオヴたち姉弟きょうだいの両親もな。今じゃポル
カが親代わりさ」

そっぴや機海から帰って無いな、あのおっさん。

「そっぴでしたか……ごめんなさい」

それからしばしの間、お互い無言で海を見ていた。

なんとなく、俺から触れなくてはならない気がする、口にする。

「しかし、とんでもない話だよ……タイムマシンか」

レオナは海を見たままだ。

「正直、歴史とか未来とかスケール大き過ぎて分からないよ」

俺がレオナを助けたのは本当にちよつとした冒険心からだつた。

バイクに乗って謎の女の子を助けて、ちよつとしたロマンス。そういうのに手を伸ばしただけのつもりだつたんだ。あの時、レオナの体の軽さに安心した。ああ、俺が受け止めたのはこれくらいで済む物なんだ良かった、って。

でも違つた。俺が背負い込んだ彼女は更に馬鹿デカイもんを背負い込んでいて……もう俺の手の届く範疇じゃない。

レオナがまたうつむく。

「ごめんなさい」

彼女は今日謝つてばかりだ。

「なんでレオナはすぐ謝るんだよ？」

金具から降り、彼女の両肩に手を置く。笑顔を無理矢理作って。

ふとその時、彼女がブラウスの内側に何か首から下げているのに気付いた。

「これ……」

思わず手を伸ばす。

「あ！これですか？これは出発前にジンナイさんがくれた御守りで——」

胸元から彼女が取り出したのは、細長いアクセサリーに鎖を通したネックレスだつた。銀色に輝くそれはほとんど棒状と言っても差し支え無く、何か意味ありげに見えた。

まるで、何かの鍵のような——

ズシン……。

突然レオナの体が宙に浮かんた。

浮かんだんじゃない……持ち上げられている！

「まったく、手間を取らせないで下さい、お嬢様」

機海で立ち塞がった黒い男、シンドウだった。

シンドウがグリズリーの背部にある操縦席から俺を見下ろしている。見下している。

体が動かなかった。少しでも動けば潰される、言葉が無くて目ではつきりと分かった。

「ウィルバー……」

グリズリーのエンジン音と波の音で掻き消されそうなレオナの声。
「レオナ……」

俺も呟くだけで限界だった。全身から冷や汗が噴き出ている。

シンドウはそんな俺の様子を見て満足げにニヤリと笑うと、グリズリーを操って街の方へと消えて行った。腕にレオナを掴んだまま。恐怖から解放されて、動けるようになったのは黒いシルエットがすっかり見えなくなっただけだった。

ようやく事態を把握する。

——レオナが攫われた。

結末へのオーバーチュア

トンネルに駆けて戻ると、オヴがスプレーを使って俺のバイクに塗装を施しているところだった。

「あ、ウィル！ 頼まれた通りやってみたよ」

見るとバイクの正面右側に小さく「R A T R U N N E R」と赤くペイントが入っていた。

ああ、これをオヴに頼んだ時にはこんな事になるだなんて思わなかった。

レオナを連れてここに帰って来た時には、混乱してはいたけどまだ非日常へのワクワクの方が大きかった。レオナの台詞が気に入ったのでバイクもラットランナーと呼ぶ事にしたんだった。

でも、今は……。

「オヴ……レオナが攫われた」

カラン。コロンコロン。

オヴの手からスプレー缶が落ちて転がった。

「……え？」

「攫われたんだ。グリズリーで連れて行かれちゃった」

「どうして……」

オヴの顔が紅潮していた。手がスプレーを持つ形のままプルプルと震えている。

「どうして助けなかったのさ！」

オヴの声がトンネルの中で反響する。何重にも重なって俺を責める。

「無理だったんだ……奴がその気になれば俺なんて……俺なんて……」

一瞬で殺せたはずだ。

シンドウの俺を見る目は蟻を踏んで遊ぶ子供の目そのものだった。敵わない。アオイ社なんてデカイ敵、戦えるはずがない。

「……弱虫」

深く胸に突き刺さる言葉だった。弱虫。今の俺は本当に弱虫だ。

「誰が世の中を操ってるとか、そんな事が怖いのかよ！」

何もかもが怖かった。自分の生きるこの世界が誰かの意図のまま動いてる事とか、連れ去られたレオナがどういう目に遭うのかとか
「僕の知ってるウィルはもっと勇敢で格好良くて、誰かの為なら命だつて投げ出すような人で」

「やめろ！ 違うんだよ！」

俺はそんな人間じゃないんだよ！

「悪戯半分で盗みをして、気まぐれで人助けして、でも本当に誰かが困っている時には体が動かない様なそんな人間なんだ、俺は！」

「……じゃあ、分かったよ」

怒りを押し殺すように息を荒げ、オヴが手を差し出した。

「……なんだよ？」

「ラットランナーのエンジンキー。ウィルが助けられないなら僕がレオナを助ける」

「駄目だ」

「ウィルはレオナを見捨てるんでしょ？ なら今バイクは要らないじゃん」

オヴの声がまた荒くなっていく。よく聞いてみれば怒り方がリリィにそっくりだ。

見捨てるという言葉もまた突き刺さる。本当の事なのに。

「お前には自分のバイクがあるじゃないか」

「この街ではラットランナーの方が速い、そうでしょ？」

俺よりずっと小さなオヴがこんなにも必死になってレオナを救おうとしている。アオイ社のビルを守るグリズリーの相手にもならないような小さな子供がだ。

なのに……俺はこんな所で何してるんだよ！

「……なあ、オヴこっいうのはどうだ？」

そしてさっきの言葉をもう一度。

「お前にも自分のバイクがあるじゃないか。二人で助けに行くつのは？」

「……そういう事なら、良いよ」

踏ん切りがついた。オヴには感謝しないとな。

「でも……僕たちどうすれば良いのかな？　ただ突っ込むだけじゃきつと警備は抜けられない」

確かに。向こうも俺たちがやって来るのを予想して警備を増やしているに違いない。

その時、暗がりから声が聞こえた。

「作戦ならあるわよ」

リリーだった。腕組みをしながら隠れ家のドアに寄りかかっている。

しかし服がいつものリリーでは無い。まるで……その服は……。

「お前……」

「正直ね、私にとってはあの子の言う事が本当かどうかなんて関係無いの」

そしてオヴのバイクに近寄り、かけてあったシートを取って後ろに乗り込む。

「そんな事どうせ証明できないわ。でも一つだけはつきりしてるのは、レオナを助けて目的を達成させてあげれば良いって事。もしレオナの話が本当なら歴史は元に戻って私は平和に暮らせるし、嘘ならあの子を追いだしてこれまで通りに暮らせばいい」

そっぽを向いて、少し照れるように続ける。

「とにかく、このままじゃ何か釈然としないの！」

「レオナはどうしてる？」

社長室に入って来たシンドウにヨシノブは静かに尋ねた。

「おとなしいものですよ。取りあえず見張りを二人付けました」

「十分だ。見張りを続けさせる」

「了解しました」

シンドウは短く礼をした後、ヨシノブのデスクの前まで近づき彼と向かい合った。

ポケットから丁寧に一つのペンダントを取り出した。レオナが首からかけていた物だ。

「この鍵はどういたしましょうか？」

「……お前に預けよう」

一瞬判断に迷ったが、シンドウを信じる事に決めた。ジンナイには裏切られたが、奴以上に自分に忠実なシンドウになら任せられる。「あと二時間ほどだが、それまで間に私の身に何か起きるかもしれない。その時は私の代わりにお前が我々の時代に帰り、計画を完成させるんだ」

「承知しました」

再び鍵をポケットに収めるシンドウ。そしてそのまま部屋を渡って行く。

まさに今、ヨシノブの時空を跨いだ計画が終わろうとしていた。

「長かったな……やっとまた会える」

ジリリリリリリリ

社長室の電話が鳴った。内線だ。

シンドウが足を止める。ヨシノブはすぐさま受話器を取った。

「私だ」

「社長大変です！ スワープ市内を警備していたグリズリーからの連絡です」

「……」

「お嬢様が、レオナお嬢様によく似た少女がバイクで街から逃げ出そうとしているとの事。もしやシンドウ様が連れて来たのは……偽物の可能性があります！」

「……」

「どうなさいます?」

「……即座に捕縛。ありったけのグリズリーを投入するんだ」
「捕えてある方は?」

「私が今から自分の目で本物が確かめに行く」
電話が切れた。

「シンドウ、聞いていたな?」

「……はい」

顔を青ざめさせながら頷いた。

「もしお前が連れて来たのが偽物だったら、どうなるか覚悟しておけよ」

全身に怒りをたぎらせて、ヨシノブは乱暴にドアを開けて出て行った。

その少女を乗せたバイクは堂々と大通りを走っていた。

運転するのは赤毛の男の子。その背中に白い清楚な服に赤いリボンを胸元に付けた少女が掴まっている。顔を隠すようにベレーをかぶりながら。

そしてその後ろを、多くのグリズリーが追っている。アオイ社が保有するグリズリーのほとんどが動員されていた。

「うまく行ってるわね」

白い服の少女——リリーが囁いた。金髪でバレないように、しっかり髪は帽子の中に入れている。

「うーん、でも髪がベタベタで気持ち悪い」

運転するのはウィルバーでは無くオーヴィル。スプレーを使い、金髪を赤毛に染めている。

「少しの間よ、我慢して」

「……にしても、どうして姉ちゃんそんな服持ってるのさ?」

「わ、悪い？ 私だってこういう女の子らしい服着たくなるのよ」
ウィルバーやオーヴィルと同じく、普段は古着ばかりのリリー。
きつと懂れて自分で作ったんだろうな。夜中にこそそと工房の
マシン使っている事あったし。そんな事を考えながらオーヴィルは
バイクを走らせる。

変装は思いの外うまく行ったようで、見事グリズリーを引きつけることに成功した。

「後は、ウィルバーがうまくやってくれるのを祈るだけね」

背後ではますますグリズリーが数を増している。まるで黒い津波が追ってきているようだ。

「ついでに俺たちの無事も祈ってよ、姉ちゃん。僕こいつら振り切れる自信無い」

煙突を垂直に駆け上り、そこから教会の塔を経由して工場の屋根の上へ。

平たく長いそこで助走を付け、また次の屋根へ。

エンジンの具合は絶好調。俺は考えられうる最短のルートでアオイ社のビルを目指した。

リリーの作戦がうまく行っていれば警備は手薄なはずだ。お世辞にもオヴの変装は俺に似ていると言い難かったが、リリーの方はレオナによく似ていた。ああして見ると、あいつも女の子なんだよな。

ビルまで着いた。外には誰も居ない。そのまま入口のドアガラスを突っ込んで破る。もしかしたら警報機が鳴るかもしれないと思っただが、それもどうでも良いと思えるくらい急いでいた。

外では日が沈みかけている。なんだかそれが俺たちのタイムリミットのように見えて、気持ち焦っていた。夕陽が沈んだらもう何もかも手遅れになるような気がして。

どこかは分からないが、レオナはこのどこかに居るはずだ。建物の中を走るのは気が引けるが、スピードを考えるとやはりバイクで探しまわる事になるだろう。幸いビル内はどこも広く、小型のラックトランナーなら楽々走って行ける。

吹き抜けのエントランスホールからとりあえず一階を探していこうと思った時、そいつはやって来た。

「やはり来ましたか」

「シンドウ……」

グリズリーに乗った黒眼鏡の男が吹き抜けの二階部分からこちらを見下ろしていた。相変わらず虫を見るような目で。

「社長は用心深い人ですから、このビルはこの有様ですがね」

両手を広げ、他に警備が一切居ない建物を内を示す。

「私は最初から分かっていたよ。どうせおとりを使って貴様自身が出てくるだろうと！」

「……良い勘してるじゃねえか」

レオナが閉じ込められている部屋の前にヨシノブは立っていた。彼自身にとっては数年ぶりの再開。すぐにドアを開けられずにいた。

意を決して中に入る。

「お父さん……」

部屋の中に居たのは間違はなく彼の娘、レオナだった。反対側の壁に張り付くようにして彼の事を見ている。

「レオナ、迎えに来たぞ。母さんは蘇った。私たちの時代へと帰ろう」

レオナは固く結んだまま唇を開かない。

「そうか、レオナからすれば私のしている事がどういう意味を持つのか、分からないのも無理は無い」

一歩踏み出す。

「けれど帰ればわかるさ。私が正しいってことが」

「……嫌です」

「何故だい？ ああ、もしかしてあのウィルバーとか言う少年のせいかな？」

ハッとするレオナ。

ヨシノブはとくに彼女をシンドウから守った少年の事を調べていた。警察にも顔のきくアオイ社にとっては簡単な事だ。

「彼も可哀そうだと言うのは分かる。彼の両親は私が殺したようなものだしね」

「……！ 今、なんて？」

「え？ 彼から聞いて無いのかい？ あの件を根に持って彼は私たちの邪魔をしているんだとばかり思っていたが」

「何の事が言つて下さい！」

レオナが怒鳴った。ヨシノブが少したじろぐ。

短く面倒くさそうに溜息を吐くヨシノブ。

「彼の両親、確か彼の友達の姉弟の両親もだったかな。小さな工場で働いていたらしいんだよ」

言葉を切り、レオナの反応を見る。

「そこに私とその部下がこの時代にやって来た。未来の技術を持つてね。この街の工場なんてみんな潰れたよ」

「……」

「中でも彼らのご両親が勤めていた所は経営が危なかったらしくてね。従業員一人一人にも借金を負わせていたそうだ」

「……まさか」

「職を失ったその工場の従業員は皆自殺したそうさ。当時はまだゴミ捨て場では無かった機海に身を投げて」

レオナはその場に崩れ落ちた。

——私は、ウィルたちに何て言えば良いんだろう？

——私の親のせいで、彼らの親は……。

親は戦争で死んだと嘘をついたウィルの横顔を思い出す。

もう、何も考えられない。

「この時代の人間なんて所詮、私たち未来の者の駒に過ぎないんだよ」

ヨシノブがレオナの手を取って部屋の外へ引つ張って行く。

「さあ、そんな駒の事は忘れて一緒に行こう」

オーバードライブの果て

——西暦2014年。日本。

黒い服を着た人々が帰って行く。一人、また一人。通夜が終わってから何時間経っても彼は立ち上がる事が出来なかった。

涙は枯れる事無く溢れてくる。どうして、本当にどうして彼女は逝ってしまったのだらう？

「パパ……」

その声で顔を上げた。彼の幼い娘が少し離れた所に立っている。

「おなかすいたよ、パパ。はやくかえろう」

娘に言われてこんなに時間が経っている気付いた。

「そうだな、もう帰らなくちゃな」

いつまでも、もう居ない彼女にすがりついては居られない。自分はこの子の父親なのだ。

立ち上がり、娘の手を取って歩き出す。

「ねえパパ。きょうもカレーなの？」

「昨日はシチューだっただろ？」

「いれるルーが違うだけでしょ」

「ごめんな。パパ、カレーしか作れないんだ」

「ふーん、じゃあなんでママがおりょうりしないの？」

「……」

男は足を止めた。

「なんでママおりょうりしてくれなくなっちゃったの？ もうびょうきはよくなつて、げんきにもどったんでしょ？」

男には言えなかった。先週から妻が自宅に戻っていたのは、残された時間を娘と過ごすため、病気が治ったからではないと言う事を。

妻が娘を心配させないため嘘をついたのだらう。なんと罪深い嘘

なんだ。

「ママ、びょうきのまえみたいにおりょうりつくってくれたじゃない。どうしていなくなっちゃったの？」

男はたまらず、娘を力いっぱい抱きしめた。

「ごめんな。ごめんなレオナ。ママはもう居ないんだ」

泣きじやくりながら男は言う。

「ママはな、死んじゃったんだよ」

「……うそよ」

「本当なんだ。これからはパパが料理を作る。洗濯も掃除もする。

パパがレオナのために生きるから。ママの代わりの分も全部」

一層強く抱きしめる。そうして居ないと、何か大事な物が壊れていく気がした。

しかし、

「やだよ」

娘が男の腕を振りほどいた。

「ママじゃないとやだ！　パパにかわりなんてできないよ！」
娘が泣き叫ぶ。

「レオナにはママがひつようなの！」

もう、男の目から涙は流れなかった。

人は本当に絶望に追いやられると、涙すら出無くなる。

——半年後。

「奥さんを……生き返らせる？」

「そうだ。理論上可能さ」

男はかつて大学に居た頃の院生を一人呼んで言った。

「……確かに、奥さんと適合する骨髄ドナーが今後現れれば、過去に戻って移植すれば……」

「ああ、その方法なら諦めたよ」

酷く淡白な口調で男は相手の台詞を遮った。

「同じようにドナーを待つ人間が世界中にうじゃうじゃ居る。既に

死んだ人間の為に骨髄をくれる物好きなんて居ないさ」

「じゃあ、どうやって？」

男は相手に新聞を投げてよこした。開かれた記事は「白血病の新たな治療法が確立 十年以上の延命可能に」。

「半年。たった半年だ。半年医療技術が進むのが早ければ、彼女はまだ死ななかった」

「……まさか」

「そうだよ、陣内。世界の技術進歩を加速させるんだ。時間移動ができれば可能だろう？」

陣内は息を呑む。

「……考え直す気は無いのか？」

「無いね。レオナには母親が必要なんだ」

「それなら再婚でもすれば……」

「だって、それは彼女じゃないだろう？」

不気味な笑みを浮かべる男。

「なあ陣内。レオナには彼女が必要なんだ。誰も代わりなんてできない」

男が陣内の肩に手を乗せる。

「ざっと百年以上加速させれば、確実だろう？ 協力してくれ」

強烈な右ストレート。後輪を軸に車体を回転させ、ひらりとかわす。

「猪口才な！」

グリズリーの両腕が俺を叩き潰そうと上から迫る。とつさに電磁力をオンにし、階段の手すりに吸いついて避けた。

シンドウの猛攻は更に続く。俺はなんとかラットランナーの機動

力を活かしてかわすが、一向に反撃できない。

シンドウは苛立ちからか、段々と冷静さを失って行っていた。会社ビルが壊れるのも気にせず、グリズリーの腕力を目一杯振りかざす。操縦の邪魔だと考えたのか、スーツの上着も脱ぎ捨てた。

次第に俺は通路の一つに追い詰められていく。諦めてその中へと逃げ込む事にした。

無理にあいつの相手をする必要は無い。俺の目的はレオナを助け出す事だ。

「逃がすか！」

慇懃無礼な態度はどこへやら、顔を歪めながらグリズリーを駆って追ってくるシンドウ。

曲がり角をドリフトで曲がる。その先にドアが開いている部屋が見えた。迷わず中へ。

ラットランナーが滑り込むと同時に、グリズリーのずんぐりした体が入口を塞いだ。

「残念だったな、行き止まりだ」
しまった……。

そこは確かに行き止まりだった。広くて天井の高い部屋だが、たくさんの機械が積み上げられているおかげで大分狭い。

よく見ると機械は全てジャンクパーツ。アオイ社の中で出た失敗作の商品類なのだろう。

「クズはクズらしく、ごみ溜めに辿りついたか。まったくクズらしい最後だよ」

ギリギリとグリズリーが間を詰めてくる。

「おいおい、クズとは失礼じゃねえか。俺みたいなのこそ泥だって一生懸命生きてるんだぜ？」

「私にとってはこの時代の人間全てがクズだ。与えてやらなきゃろくな技術も持っていない原始人だ」

聞く耳なしか。とにかくこの状況をなんとかする方法を考えなくては。

俺は辺りを見回す。しかしどんなに使える物を探してもあるのはジャンクパーツだけ。

その時ひらめいた。ならばそれ全体を使えば良い。

「しかしこんな原始時代に居るのももう終わりだ。ついさっき完成した」

「……何がだよ？」

俺は気付かれないようにバイクの後輪に巻いたコイルの留め具を外した。ぶらんと力無くコイルの端がぶら下がる。

「タイムマシンさ。こちら側の時代でもう一度作れば、また私たちの時代へ戻れるだろう？」

コイルの端を手で曲げる。上手い具合にかぎ状になった。

「そう言えば、貴様らの両親は工場を社長に潰されて自殺したそうじゃないか？　うちの社長の目的の為の尊い犠牲、感謝するよ」

「……言いたいのはそれだけか？」

俺はかぎ状にしたコイルの端をグリズリー目掛けて投げた。思い通り肩と腕との間の関節部分に引っかかる。

間髪入れずに俺はアクセルを入れ走りだす。

「諦めが悪い！」

振り下ろされる腕、脚。狭い部屋の中のスペースをフルに使って避け続ける。

なるべく、グリズリーの周りを回るようにしながら。

「……な！？」

シンドウが異変に気付いたのは俺がグリズリーの胴体にコイルを巻ききつてからだった。

銅線が乱雑に巻かれたグリズリー。これだけでは何も起きない。

しかし、俺が電磁力のスイッチを入れれば……。

「すごい技術を持った未来人様なら当然知ってるよな？　心棒にコイルを何重にも巻き付けた物をなんて言うのか」

「……電磁石」

その通り。ラットランナーもホイールの中心に心棒を取り付け、

そこにコイルを巻いて作った電磁石であらゆる鉄の上を走っている。今そのコイルは心棒の役割をするグリズリーの胴体に巻き付いていて……。

電磁力のレバーに足を延ばす。

「や、やめろ！」

シンドウが叫んだが——俺はもうスイッチを入れていた。

コイルに電流が流れる。そして発生する磁場。その中心はシンドウの乗るグリズリー！。

ズズッ

ジャンクの山の一つがグリズリーに向けて少し動いた。

ズズッ ゴゴッ

磁力に引き寄せられてジャンクパーツたちが蠢き始める。

ラットランナー本体も引き寄せられるのを感じたので、俺は迷わず飛び降りて部屋の外に出た。

まるでそれが合図だったかのように、タイミングを合わせてジャンクが宙を舞った。磁力の渦の中心へとネジとモーターが飛び付く。シンドウごとグリズリーを包み込むように冷蔵庫とラジオの残骸が吸い付く。ラットランナーもグリズリーを襲う機械の群れに加わった。

シンドウの断末魔が聞こえる。

その様はまるで捨てられた機械の怨念たちが恨みを晴らすべく襲いかかっているようだった。電流は流れ続け全てのジャンクが吸いついて巨大な団子のように固まっても止まらない。

「まったく、どっちがクスらしい最後だよ？」

続く絶叫を聞きながら、俺は部屋を後にした。

——アオイビル最上階。

「これ……」

レオナは目の前に広がる巨大な空間を見て絶句した。
大きな画面。大きなパイプ。大きなランプ。機械を冷却する為のファンが低い音を立てて回っている。

ワンフロア全てぶち抜いた無機質な部屋の中彼女は父親と二人で立っていた。

「見覚えがあるだろう？ 私たちの時代で作ったのとまったく同じものだから」

そう、彼女はこれと同じ装置でこの時代へやって来た。

ジンナイが操作をし、父が行ったのと同じ場所・時代に設定。電源をチャージしている間に転送ボックスの中へ。

ボックスの中は一辺が十メートルほどの立方体状で、その中でお守りを手渡された。

——これはお守り。全ての鍵です。

あなたが持つべきだ、と言ってジンナイはレオナの手の中にそれを置いた。

あの時と同じ風景を見ると、忘れていた出発前のいろんな事が思い出されてきた。こっちに来てからは驚く事の連続で、体感的には数時間前の出来事なのに、ずっと昔の事のように思える。

でも、もう彼女は疲れてしまって何も出来なかった。何も考えられなかった。

このまま知らんぷりしているのも良いかもしれない。もしも父の言う事が本当なら私は平穏な日々を取り戻せる。

——そう、私だけ。

「ノウハウは出来ていたが、やはりこの時代だと材料の入手が大変

でね。もう一度作るのに何年もかかってしまった」

ヨシノブはモニターが備え付けられた装置の前まで行き、いくつかキーを叩く。

「でもやっと完成だ。後は転送に必要な電力を集めるだけ。その準備も既にしてある」

「駄目だ！ もう燃料が切れる！」

オーヴィルが悲鳴を上げた。

海沿いに逃げる内に、太陽はほとんど水平線の向こうに姿を隠そうとしていた。それでもまだグリズリーの群れは追ってくる。

「嘘！ とうにかしてよ！」

「無茶言つなよ！ 燃料なしでどうやって走れば良いのさ？」

そして段々とバイクは減速し——止まった。

わらわらとグリズリーの群れが幾重にも二人を取り囲む。

どっちを向いても真っ黒な鉄の壁。逃げ場はどこにも無い。

「オヴ、あんたとウィルでバイクに機関銃付けてたじゃない？ あれ使ってよ」

「無理だよ。あれ見た目だけの玩具だもん」

輪から一体が抜けて近づいてくる。ノシノシと一歩ずつ、ゆっくりと。

オーヴィルとリリーの二人は息をする事も出来ず、ただそれを見ていた。

グリズリーの腕がリリーを掴もうと開かれ——停止した。

街外れの荒野で音を立てるのは風だけ。一体だけでなく、他の数十体のグリズリーも何故か停止していた。

「……え、なんで？ なんで？」

首をかしげるリリー。オーヴィルはバイクを降り、近づいてきたグリズリーの体を調べる。

「どこも壊れて無い。燃料もまだ入ってる。って事は……」

遠景の街に見える、アオイ・モーターズのビルを見つめるオーヴイル。

「……遠隔操作が止まった？」

そこで二人は異変に気が付いた。

今や太陽は完全に沈み、薄暗くなっているのに街に明かりが無い。

ビル中の明かりが突然消えた。

「何だ？」

俺はちょうど廊下を通ってエントランスホールまで戻って来た所。邪魔者も倒したしレオナの搜索を再開しようと思った矢先だった。

何か明かりになる物を探そうと思い、うろつく。すると、何かを踏みつけた。

「何だこれ？」

持ち上げてみると、さっきシンドウが脱ぎ捨てたスーツの上着だった。役に立たないので捨て置こうとしたが、ポケットに何か入っている。

取りあえずここでは暗くてよく分からない。ガラスを通して外から淡い光が見えたので、一度ビルから出てみる。

ポケットの中に入っていたのはレオナのペンダントだった。シンドウに奪われていたらしい。

後でレオナに渡す為に俺のポケットに収める。そこでおかしな事に気付く。

どうやら街全体が停電しているらしく、ビルの中同様一切電気が付いていない。しかしこのビルの周りは淡く明るいのだ。

光源を探し、視点を上に向ける。

ビルの最上階から溢れんばかりの光が放たれていた。まるでそこに街中の明かりが集められているかのように。

稲妻のように波打つ光を見て俺は確信した。あそこに全ての元凶、ヨシノブが居る。
きっと、レオナも一緒に。

オーバーラップする物語

「……今何と言った？」

ビル最上階。

転送装置から光が漏れだす中、ヨシノブは自分の娘を睨みつけた。
「お断りする、と言ったんです」

今この部屋にはスワープの街中から集めた電力が蓄えられている。
脈打つ光が二人の顔を交互に照らしている。

「私は……あなたの作る幸せな生活なんて要らないんです。別に母さんにも生き返って欲しく無い」

「レオナ……お前なんて事を！」

「私は、母さんが死んだって幸せだったんですよ！」

父親の言葉に重ねてレオナが叫んだ。

「母さんが死んだのは悲しかったし、生きててくれた方が幸せですよ！ でもね、あなたが母さんを生き返らせる為に他の人が不幸になるのは嫌なんです！」

「ふざけた……ふざけた偽善だ！ 世界中の人間を幸せにすることなど出来ん！」

「分かってますよ！ なら私が少し不幸になれば良い！」

レオナは喉を詰まらせる。

「私は、あなたが居てくれれば十分幸せだったんですよ！」

がっくりとヨシノブが膝をついた。

糸が切れた操り人形のように、その場に倒れ込む。

「どうして」

虚ろな目がレオナを射抜く。

「どうしてもっと早く言ってくれなかったんだ？」

そのあまりに恐ろしい視線に思わずレオナは目をそらす。

答えはもう分かっていた。誰がどうすれば良かったのか。

「私が……弱虫だったからです」

彼女も父親と共に膝をついた。

「私があの時もつと強ければ、あなたの優しさに甘えたりしなければ、一番良かったんです」

光のうねりが激しくなる。

装置の中でも一際大きい赤いランプが灯った。電源チャージ終了の合図だ。

「今更もう遅いさ。私は過去を変える」

よろよると、亡者のような足取りで歩きだすヨシノブ。もうその目は何も見ていない。

「私が今すぐ、私がこの時代へと出発した五分後へ帰り、タイムマシンを破壊すれば良い。そうすればもう誰も歴史に介入することはできない。私の作った歴史にはなあ！」

「させません！」

レオナがすがりつくが、彼女の細い腕は意図も簡単に振り払われる。

それでも彼女がすがりつくと、ヨシノブはレオナを突き飛ばした。「邪魔をするな！ 私は私が……レオナが幸せならばそれで良い！」

そして転送ボックスの前に立つ。ヨシノブは懷からネックレスを取り出した。

それはレオナがお守りとして受け取ったのと同じ物。それは転送ボックスのドアの鍵穴にピッタリはまり、解錠した。

ヨシノブが中に入るとすぐに内側から施錠する音がした。そしてボックス全体が光り出す。

「遅かったか！」

息をぜえぜえと言わせながらウィルバーが部屋に入ってきた。しかしすぐにボックスは雷に覆われ——転送が終わった。

ヨシノブに逃げられてしまった。これで過去の世界のタイムマシンは破壊される。

つまり、レオナがこの時代に来る事はできなくなる。歴史は完全に固定された。

「やっぱり……無理でしたね」

レオナの目から涙がこぼれた。すかさずウィルバーがレオナを抱き起こす。

「そもそも私がウィルバーに助けを求めるの自体が、おこがましかったんです。父はウィルバーの両親を……」

一瞬、一瞬だけウィルバーの目に怒りが宿った。

「ウィルバーがラットランナーを作った理由もきつと……」

彼とリリー、オーヴィル姉弟の両親は機海に身を投げた。しかし遺体を引き上げようにも今は廃棄された機械の山が邪魔で無理だ。

ウィルバーには手段が必要だったのだ。機海の底へと入って行く手段が。

「もう何もかも、終わりですよ」

「諦めるんじゃないええ！　すぐにこっちもタイムマシンで追いかければ――」

「無理じゃよ」

しわがれた声が聞こえた。

二人が振り向くと、そこに居たのはポルカだった。いつもの通り、腰の後ろに手をやって無表情だ。

「ポルカ！」

ウィルバーは今までどこに居たのか問いただそうとしたが、レオナが遮った。

「そのネクタイ……もしかして？」

ポルカはいつも通り水玉の可愛いデザインネクタイをしていた。

レオナには見覚えのある、特徴的な柄。

「……ジンナイ……さん？」

「お待ちしておりました、お嬢様」

ポルカが曲がった腰を更に曲げてお辞儀をする。

ウィルバーはあまりの事にポカンと口を開けていた。

——ポルカが、ジンナイ？

「事情を説明しましょうかの」

ポルカはひよいと飛びあがって機械の操作盤の上に座った。

「あの日、我々はヨシノブの後を追って同じ地点・時代に行こうとした。しかし、それは無理だったんじゃ。時間移動の後は時空が歪み、しばらくの間時間的に近い場所には行けぬのじゃよ」

まあ、あの後わしが独自に建てた仮説じゃがな、とポルカ——いやジンナイは付けくわえた。

「おそらくそのせいでわしとお嬢様は歪みに弾かれ、別な時代に飛ばされてしまった。お嬢様は今この時代に。わしは本来の目的地の四十年前に」

二人は黙ってジンナイの話を聞き続ける。

ジンナイはあくまでウィルバーの知っているポルカらしく、落ち着き払い感情を出さずに語る。まるで彼にとって四十年もの時を待ち続けることが何の苦でも無いかのように。

「じゃから、今ヨシノブを追う事はできん。不可能じゃ。ヨシノブがこの時代に現れ次第わしが奴を止めれば良かったんじゃがな、その時はわしは既に老いぼれで……何も出来なかった」

言いながら、初めて悔しそうな表情を見せるジンナイ。

「そんな……じゃあ、私たちのしてきた事はみんな無駄なんですか？」

レオナが再び泣き崩れる。ウィルバーは優しくその肩を抱いた。

部屋はまた絶望感で包まれた。

しかし——。

「しかし、のう。別の時代ならば可能なはずじゃ。別の時代でヨシノブを止められればのう」

ハツとするレオナ。操作盤に向かって日付と場所を入力し始める。
「ジンナイさん、もう一度転送できますか？」

「街がもう一度大停電を食らうが、些細な問題じゃな」

慌ただしく作業を始めるジンナイとレオナ。ウィルバーはそんな二人に置いてきぼりを食らって、ただポカンと口を開けたまま見ていた。

電力が部屋に溜まり始める。光が段々強く、うねりだした。問題が起きたのはその時だ。

「あ……そうだ、鍵がかかてる」

転送ボックスのドアノブに手をかけたレオナが気付いた。内側から施錠されている。

「お嬢様、お守りとして渡したはずですが……」

「それが、奪われてしまつて……」

「それならここに」

一瞬時間が止まった。

蚊帳の外だったウィルバーがペンダントを取り出して、レオナに渡す。

「なんでもっと早く言わんのじゃ！」

「仕方ないだろ。そんな大事な物だつて知らなかったんだ」

誰かの命を扱うかのように、大事にレオナはペンダントを手の中に抱え込んだ。

「感動の別れじゃな。涙が出るわい」

ポル力が言うが無表情なので白々しく聞こえる。

レオナはにつこり笑って鍵穴に挿しこみ、中へと入った。しかし、ドアを閉じようとしな

「私が行かなきゃ駄目なんですよね」

「他に誰が居るんだよ？」

「うふふ。言ってみただけです」

少しさみしげにまた笑う。そして彼女はゆっくりとドアを閉じた。ドアが閉められてもウィルバーはその場を離れられなかった。遮

られて見えなくなっても、レオナの姿をその向こうに見ようとしてしまう。

でも、声が出ない。

何か言うべき事があるはずなのに、声が出ない。

「それじゃ、行つてきます」

ボックスが光に包まれる。

今しかない。ウィルバーは意を決して思いっきり叫んだ。

「レオナ！ お前と——お前と出会えて良かった！」

「……！」

「俺らの親の事とか気持ちの整理が付かないけど、お前と出会えて良かった！」

「……ならさ」

ドア越しにレオナの透き通った声が聞こえる。

その声はもう機海で会った時のおどおどしたものと違い、意思と希望に満ち溢れていて……。

「なら、また会おうよ！」

光が消えてなくなるまで、ウィルバーはじつとタイムマシンを眺めていた。

不思議と気分は穏やかだった。レオナと出会った瞬間からいつかこうなるような予感があったのだ。すぐに離れ離れになるような予感。

ただ一日、一緒に居ただけの少女。

しかしウィルバーの中でレオナは、確実にそれ以上の大きな存在になっていた。

それでも心は安らかだ。何故だろう？

また会える気がする。

——西暦2014年。日本。

着いたところは火葬場だった。

黒い服の人々の群れの中で白を身に纏ったレオナはよく目立った。行き交う人々が不謹慎な娘だと言う目で彼女を見る。

レオナはある人物を探していた。小さなその人を見つけるのには大分時間がかかったが、とうとう中庭で立っているのを見つけた。

「おねえちゃん、だれ？」

小さな女の子はレオナを見ると首を傾げた。

レオナは何も言わず、そっとその子を抱きしめる。

しばらくそうしていた後、レオナは女の子の耳元で囁いた。

「レオナちゃん、落ち着いて聞いて欲しいの」

「なに？」

「レオナちゃんのママはね、天国へ行っちゃったの。分かる？」

「てんごく……しんじやったの？」

「そう、死んじゃったの」

「うそだよ。ママすこしまえに、たいいんしたんだから」

「ううん、本当だよ。でも大丈夫」

「だいじょうぶじゃないよ。ママがいなのなんて、いやだよ」

「大丈夫。レオナちゃんには、パパが居てくれる」

「……パパはいなくならない？」

「うん、パパはずっとレオナちゃんと一緒に居てくれるよ」

「だからレオナちゃん、強くなつて」

「パパと一緒に強くなつてね」

黒い服を着た人々が帰って行く。一人、また一人。

通夜が終わってから何時間経っても彼は立ち上がる事が出来なかった。

涙は枯れる事無く溢れてくる。どうして、本当にどうして彼女は逝ってしまったのだろうか？

「パパ……」

その声で顔を上げた。彼の幼い娘が少し離れた所に立っている。

「おなかすいたよ、パパ。はやくかえろう」

娘に言われてこんなに時間が経っている気付いた。

「そうだな、もう帰らなくちゃな」

いつまでも、もう居ない彼女にすがりついては居られない。自分はこの子の父親なのだ。

立ち上がり、娘の手を取って歩き出す。

「ねえパパ。きょうもカレーなの？」

「昨日はシチューだっただろ？」

「いれるルーが違うだけでしょ」

「ごめんな。パパ、カレーしか作れないんだ」

「ふーん、じゃあなんでママがおりょうりしないの？」

「……」

男は足を止めた。

「なんでママおりょうりしてくれなくなっちゃったの？ もうびょうきはよくなつて、げんきにもどったんでしょ？」

男には言えなかった。先週から妻が自宅に戻っていたのは、残された時間を娘と過ごすためで、病気が治ったからではないと言う事を。

妻が娘を心配させないため嘘をついたのだろう。なんと罪深い嘘なんだ。

「ママ、びょうきのまえみたいにおりょうりつくってくれたじゃない

い。どうしていなくなっちゃったの？」

男はたまらず、娘を力いっぱい抱きしめた。

「ごめんな。ごめんなレオナ。ママはもう居ないんだ」

泣きじゃくりながら男は言う。

「ママはな、死んじやったんだよ」

「……ほんとはしってた」

「……そうか」

「でも！ でも！」

少女は目から溢れて来る涙を止めようとして顔をくしゃくしゃにする。

そして、泣き顔のまま笑いながら、

「でも、パパがいるからレオナだいじょうぶ！」

——西暦2022年。日本。

「行つてきます！」

レオナは朝食も食べずに家を飛び出した。今の時間では遅刻ギリギリだ。

玄関ドアの向こうから父親の怒る声が聞こえる。無視して駆けだした。

今朝はとても気持ち良くて長く寝過ぎてしまった。どこか遠い時代で冒険をする夢。なんだかどこかで体験した事があるようなリアルさが今でも残っている。

「そうだ、宿題もやって無かった！」

走るペースを速める。彼女のスカートと髪が優雅に揺れた。

こうしてレオナは今日も日常へと駆けこんで行く。
きつと、これからもずっと。

——十九世紀。

「ねえウィル、変な機械なんか作ってないで遊ぼうよ」

「ウィル、ちよつと勉強見てくれない？」

こいつらと俺とは学校の友達。親が同じ工場に勤めてる事もあつて、よくつるんでいる。

オヴとリリー、この姉弟が来るといつもこの工房はやかましい。

トンネルの途中の扉の中に見つけた古い工房。誰が使っていたのかは知らないが、何故か自由に使って良い気がしたので俺が機械いじりに使わせてもらつてる。

しばらく無視して作業を続けていたが、我慢できずに俺は叫んだ！

「うるせえ！俺はこれが完成するまでお前らと遊んだりお勉強する時間は無いんだよ！」

ゴーグルを外し、二人を睨みつける。

さすが兄弟、そっくりな顔をしてむくれやがった。静かになったので俺は作業に戻る。

「ねえウィル、今度は何を作ってるの？」

オヴが肩越しに俺の手元を見ながら聞いてきた。

秘密にしていたい気もしたが、何となく二人には言っておいた方が良い気がする。

「これはな、時間を移動できる機械なんだよ」

「また出来もしない物作ってるのね」

リリーがやれやれと首を振る。夢の無い女だ。

でも、オヴの方は興味津々らしい。

「でもさ、なんで時間を移動する機械なんて作りたいの？」

「それは……」

自分でもよく分からなかった。思いつくままに言葉にする。

「なんとなく……会いに行かなきゃいけない奴が居る気がするんだ」

f i n .

オーバーラップする物語（後書き）

長い駄文読んで頂き、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5272n/>

オーバーテック・ストーリー

2011年2月20日01時40分発行